翔るは翅、昂るは尾皆菊なり、竹を以て體となし、體の在る所、枝隨て之に附く、葉罅には花を補ひ、花藪には葉を補ふ、舳艫色を共にし、腹背彩を連ぬ、微錦之れに觸れて毳々然たり、飄々然たり。

紅葉

○落日紅なり○地として樹ならざるはなく、樹として楓ならざるはなし青き者あり、黄なる者あり。微丹なる者あり○水を隔てゝ一林皆赤し之れを視れば即ち楓なり○青女錦を織る○江楓錦を簇らす○光彩目を奪ふ○折から野山の楓葉の、今を盛りの色見えて、濃き薄き、色々なる、彼の嶺の甘谷に曝すといふ錦にも彌益して見えしかば、頻りに興を催して御竹筒を開かせられ、君臣他念もなきをりから。

○時しも末の秋なれば、今を最中に葉を染めて、唐錦を織り延べたる如く、日色に耀き合ひて、見る目もあやなり、風のまに〳〵水の上に散り亂るゝ樣、得も言はれねど。

○西京の地たる、都を環りて皆なり、惟山多し、故に尤も楓に宜し、而して其の最も聞ゆる者を高尾と爲し、栂尾と爲す、之れを聯稱して三尾と曰ふ、三尾に亞ぐ者を嵐峽と爲す、皆其の撰なり。

○岩に碎くる谷水をも染め、木の間もく山川のあたりゝ、見渡す限り、皆楓のみなれば、蔭ふむ袖も色にうつるばかりなり。

○風につれなき所々、朽葉に染めかへてけり。常盤木ども立ち交りて青地の錦を見る心地す。

○いくむらともなく錦を張りたらんやうにて、日影に輝き合ひたる目も

あやなり。川に浮べる木の葉は紅の弓筈さらせるが如し。
○常盤木を殘〻て、あらゆる梢どもの、薄くこく染めつくしたるは、唐大和の錦をして埋めたる樣なり。
○山風さとおろせば、片邊より雲霧たなびきて、遠近の山々の紅葉ほのめきたるさま、繪も及び難し。

晩秋

○深け行く秋の季なれば、尾上に妻戀ふ牡鹿の聲、檜下に通ふ秋の風○日影短かき秋の宿、降り布く木の葉、門の霜。
○杪秋○鴨脚黄なり○雁來紅○老少年○秋日凄々として百卉具に腓む○其の氣凛冽として人の肌骨に砭し、その意蕭條として山川寂寥なり○山は秋の老ゆるに當りて容偏に瘦せ、菊は霜の濃かなるに到りて色漸く佳なり。
○秋の晷（ひかげ）の短かくて、鷄の時に入相の祇園精舍の鐘の聲、常より耳も新まり。
○時しも末の秋なれば、今を最中に葉を染めて、唐錦を織り延べたる如く、日色にかゞやき合ひて、見る目もあやなり、風のまに〳〵水の上に散り亂るゝ樣、得も言はれねど。
○頃は秋の末つかた、木々の梢の紅葉して、降る日は肌も良（や）寒く、晴るゝ日は、空青と、海面遥かに、眞帆、片帆、出船、入船、絶間なし。

初冬

○冬立つ初めの定なき空なれば、降りみ降らずみ、時雨も絶えず、嵐に競ふ木の葉さへ涙と共に亂れつゝ事にふれて心細し。

○時雨をさそふ山風は、落葉の音をさき立てゝ、野にも山にも冬の景色を送り來ぬ。

○時雨がちなる雨催ひに、山の腰は雲を吐きて、風さへ俄に吹きかはりまだくれねども、いく暗くなりて、さと降り濺ぐ村雨に頼む木の下も落葉しけり。

○山風あらく時雨きて、麓の里は落葉、空にちり迷ひぬ、あはれ都の方も、今が夜寒をかこつらん。

○小暗く茂りし木葉ども散り亂れて、いみじく哀れげに見え渡る。心地よげにさゝらぎ流れし水も、木の葉に埋れてあとなく見ゆ。

○人目も草も枯れ果てゝ、殘るも淋しき軒の松枝吹き鳴らす雪嵐○掃ふ人もなき落葉の上に霜白う置きて。

○荷葉霜に殘し、菊花風に折る○貍奴背を晒し、農老雛を補ふ○霜葉地に滿ち冷氣軒に盈つ○氣節漸く寒に向ふ○寒氣人を侵す○孟冬寒氣至り北風慘慄たり。

○折りから霜月の中旬にて、掃はぬ庭に、降り積みし木々の落葉の絶え間には、昨夜のまゝなる霜柱、踏めば音ある山壌に、袴の裾を汚さじと各稜を鷄が鳴く、四阿高く登れども、冬の木立に風寒く、瑣々鳴く藪の柴鶺鴒の、外に詠めは無きものから。

○木々の梢は冬枯れて、雨に交りて木の葉散る、翹萎れて飛ぶ鳥の、塒にかへる夕間暮、遠寺の鐘の音も冴えていと凄じき、長堤の霜の劔を踏

み分けて。

冬夜

○凄じき物に言ひ置きたるしはすの月も、見る人柄にや、よひ過ぎて出る影、さやかに澄み渡りて、雪少し降りたる空のけしきのさゑ渡りたるも、言ひ知らず心細げなるに、小夜千鳥さへ妻呼び渡るに、貫之が妹許行けばと詠みけんも羨しく眺めわび給ふ。

○十二月の月夜なれど、宮の中は皆白砂に見ゑ渡りて、木々の梢は花と見も、池の鏡もさえたるに、枯蘆のはかなく萎れ伏したる程、萬に見どころあり、音なく靜りたるに、絶ゑ〳〵岩に漏るゝ水の音ばかりして、軒端の松のみぞ、つれなく見もる。

○月明らかに星稀に、風いと寒く霜深かり、氷を摧く水鳥の立つかた遠く見上ぐれば、西は赤坂、青山にふりおく霜の眞白なる、目黑に落つる雁が音も、黄ばみ朽ちたる稿塚を、いぶせくや思ふ、夜目ながら五色もよしや四方天、南は麻生、高畷、芝浦近く寄る波も、東へ續く入江濱、北は芝崎、神田の岱、漁村樵徑雜られて、目に見もるあり、見ゑぬあり征客常に腹を斷つばかりなるながめなり。

雪

○松の雪だに消えやらで、苔の細道幽かなり○柳絮のとぶに等しく、鷺毛を散すが如し○木々の梢は花と見も、○雪の上に雪を積みて、羊腸なる路絶えぬべく○人目も草も枯れ果てゝ、殘るも淋しき軒の松。

○雪降り積り、氷柱居て、谷の小河も音もせず、峯の嵐吹き氷り、瀧の白糸垂氷となりて、皆白妙におしなべて四方の梢も見わ分かず。

○此時は既にこれ霜月にて、寒氣殊に嚴しく、空の景色烈しく、風吹き荒れて、いみじう降りくだる雪、紛々颯々として、柳絮の飛ぶに等しく鵞毛を散すが如く、見る内に、高く積もりて一面に玉を布くかと疑はれ假山、泉水、庭の木草、洲濱形、葦手形、立石、蒔石、瀧落し、架垣、石燈籠のたぐひ、庭上の好景、前栽の莊嚴、すべて皆白妙に埋もれて、心苦う遺水も、いと痛う咽びて、池の水も得も言はず凄きに。

○時しも雪は強く降り、紛々颯々として、恰かも柳絮の舞ふ如く、鵞毛の飛ぶに似たり、さらぬだに、寒さ嚴しき谷蔭なるに、朔風烈しく吹きおろせば、

○千里一白、萬里一色、滿目皆、白皚々たる白衣の中に包まれたり。

○積雪谷を埋めて一望銀世界と變じ、處々に不夜城を現出す。

○唯見る水晶界と化し、枯木、時ならぬ花を着け、其景眞に豪宕たり。

○飛雲やみて一望皎々たり、朝日三竿、燦然として之に映ず。

○江山夜ならず月千里、天地私なし玉萬家、遠岸柳絮を飛ばし、前村梅花を壓す。

○千山鳥飛ばず、萬徑人跡なし、孤舟蓑笠の翁、獨り寒江の雪に釣る。

○六花霏々として窓を撲ち、乾坤寂として他に胸襟を煩はすものなし。

嚴冬

○寒威凛烈○手を呵すれども温を成さず○兩耳凍りて幾ど脱つ○筆を呵

して詩を題す○筆凍りて字を成す能はず○鶴を飛ばして白を擧げて此の嚴寒に抵敵す○指を墜し膚を裂く○凄風刀よりも利なり。

○頃は十二月の下浣、木末の木葉落盡して、松柏の操を顯はし、山川の流水、半涸れて、石背も渡るに堪へたり、山は雪の上に雪を積みて、羊觴なる路絶えぬべく、里は茅の軒に萱を藏めて、燒火の儲け優かなり、寒風肌膚を犯しては、遠砧の音も耳に留り、群雁水田に氷を摧く時、近村の堤も、目に迥けし。

歳晩

光陰瞥々○年華匆々、奔前流水も啻ならず○光陰は風帆より疾し○光陰匆々として梭の如く○流年は猶建瓴の如し○白駒の電馳する如し○星移物變り歳聿に暮る○柳絲裊々櫻花娟々たる、三春の景物杳として痕なし○森々たる綠蔭四隣を蔽ひし日は去りて、又一點の紅を留めず○新鵑雨に啼いて萬山青く、流螢風に隨て一水明かなる、夏日の風光亦已に遠し○千崖の明月に嘯き、一葦の清風に吟ぜし高秋の風色亦曾遊夢裡に髣髴たる耳○歳月人を待たず、吾人は夢の間に早や一歳を經過したり○黄粱一炊の夢裡早や一歳を逍遙す○故園の老規を懷うて獨凄然たり○人世纔か五十年七十年は、古來稀なるに、何ぞ悠々として白雲と共に情懷を遣るべけむや○藹市喧嘩○門外雜鬧の者皆索債補欠の爲ならず乎○歳尾匆劇諸事料結、未だ全く風塵の縛を脱する能はず○春日の隣已に近し。

○去る程に今年も早や今日一日とせり詰めて、鬧はしき名に大晦日、頻りに急ぐ人脚の行き來やうやく宵過ぎて、大提灯の朧月、半は卸す見世

の戸も、明けて言はれぬ胸の闇。

○大つもごりか、つもごりか、上を下へとかへしたる、疊の表あら玉の春を迎ふる歳德の、棚にきらめく燈火も花とし言へば梅、椿、水仙も候ふぞ、福壽草も候ふぞ、召されずや、召されよと、呼聲高き鉢の木賣りが、枌似なき髭の霜、二重の腰に、八重梅を、てびく雲の、根あがり松歳暮年頭、一荷に擔ふ、冬木と春の花暦、吉例壽ぎ給へとて、店前近く呼びつゝ來ぬ。

美人英雄

君臣

○先帝の聖緒を嗣ぎて皇綱を恢張し給ふ○聖德天の如し○賢祚窮りなし○皇威赫々○武夫皆好仇○世々忠貞を厚うして皇家に勤勞す○忠精日月を貫き、誠氣虹霓を凌ぐ○名を竹帛に垂る○公心以て國に報ずべし○國を憂へ民を恤む。

父子

○恩愛深き母親の其悲みは身を刻み骨を碎ける思ひにて、はら〳〵落す涙こそ○人こそ知らぬ冲の石、涙を袖におしあて〻、子の行末を案じつ〻○田夫野人も其兒女の安否を氣遣ひ○善く其親を愛するものは百年の歡樂をして千載の壽命たらしむ○愛して其情に迷はず、憎んで其の常を失はざるは賢父母なり○之れを憎んで其安全ならんことを欲するは父母の至情なり、況んや之を愛する時に於てをや○老恩いよ〳〵厚し○燒野のきゞす夜の鶴、親として子を思はざらんや○反哺の孝、三枝の禮、烏猶道を踏む○雨につけ、風につけ、子を思ふ親の恩○父は子の爲めに隱し、子は父の爲めに匿す○此親にして、此子あり○花は根に、我は舊巢にかへれども返らぬ親ぞ慕しく○蝶よ花よと撫でし子は、無常の風に誘はれて、北邙一片の烟となりぬ○開を常なる親心子もゑの道に迷はぬはなし○父母の恩は山よりも高く、海よりも深し、膝下の孝養を忽にすべからず○山高しと雖も其恩に比し難し、海深しと雖も其慈愛に及ばず○父母の其子を養うて敎へざるは子を愛せざるなり、敎へ嚴ならざるは亦其子を愛せざるなり。

夫婦

○夫唱へ婦順ふ○婦子嘻々たり○琴瑟の情深し○貞婦秋霜の節あり○牝鷄の晨するは家の禍なり○温雅にして靜婉なり○愼重にして耐忍の風あり○心は昆玉より貞なり○節操秋霜よりも烈し○淸楚にして貞靜なり○閨秀の譽あり○淑德洋々として千頃の波の如し○婦道修らざるの嘆あり○曉舌を弄して疾聲大呼す○甚だ妬悍なり。

朋友

○善を責むるは朋友の道なり○二人心を同うすれば其利金を斷つべし○金石の交りあり○刎頸の交を爲す○朋友相標榜す○青松心を示し、白水信を顯はす○故友忘るゝ能はず○逆莫の友は飾らず○胸襟を披きて談笑す○意合すれば則ち吳越も昆弟たり○志合はざれば則ち肉骨も仇敵たり○肝膽相照らす○友道松柏と共に凋まず○君子の交や水の如く小人の交や醴の如し○勢利を以てする者は勢利盡くれば即ち絶つ○千里風雲の契○竹馬の友に恥ぢず○良交金水を契る○手を翻せば雲となり、手を覆せば雨となる○交りは須く管鮑の如くなるべし○群を離れて索居する怨あり。

幼兒

○業平朝臣の童顏か、光源氏の稚達か、日枝の愛護か、梅若かと、思ふばかりの一少年、正に是れ丹花の唇、蠶蛾の眉、齒は瓢瓜の種子を並べ眼は二星の隈なきに異ならず。

○縹致は世の常に勝れて、西施小町が童たちも、之には增ることあらじと思ふ。親の寵愛比へんものなし。

○髮は聲なき宿烏にひとしく、芙蓉の双眸、鶯吉の聲音、梅すなほなる心ざし、次第にあらはれたり。

○女兒が面影、雪の中なる姫小松、霜の朝の瞿粟に增して、愛たき女の童になりぬ。

○花よりも清く、雪よりも妙にて、玲瓏たる一双の珠玉をならべ見る如く、楊貴妃の幼だち、業平の童姿も、かくありつらめと思はるゝばかりなれば、里人等之を見て、鳶の巣に鶯を育つるに均しなど言ひて羨みぬ。

少女

○風を含める柳の髪、露にぬれたる花の唇、物の言ひ様愛敬づきて、眉は春山の遠山を上るが如く、目は秋の波の瑤池を走るに似たり。

○桃源春深うして、此花いまだ人間に折られず、溝渠秋染めて、其葉嘗て流水に伴はれず、情の色、外に顯はれ、心の雅、内に比ひなし。

○世に羞らひたる面色にて、僅に琴を引寄せつゝ、細小なる匣の中より撰取りたる假爪をいと白く細やかなる指に納めて調子を試み、梅が枝によ

る鶯の囀づる如く唄ひ出せり。

○玉指斜にして、歌ふ時は、纖々たる谷の流水、膝に流るゝかと怪まれ調ぶる時は、颯々として、峯の松風檐に通ふかと疑はれ、悲猿巴峽の聲逸音智度の鳥、笑ふが如く、語るが如く、哭くが如く、訴ふるに似たり。

○素顔白くして夏の富士の如く、眉根翠にして春の二子山に似たり。顔は三月の櫻を欺きて、暗に風の情、月の意を藏め、眼は秋の夜の二星に似て常に雨の恨、雲の愁を含む。

○肌膚は雪をつかねたるに異ならず。翠雲の長やかなる、立てば裳裾に至るべし。花ならば、未だ開きも揃はず、月ならば、十あまり三日の影とやいふべからん。

○嬋娟たる顔色、隈なき月、盛なる花にも勝りたれば、網曳する海士も

之を見ては船の流るゝを知らず、薪樵る山兒も之を見ては斧の柄の朽つるを思はず。

○桃源春深くして此花未だ人間に折られず、溝渠秋染て、其葉甞て流水に伴はれず、情の色外に見はれ、心の雅、内に比ひなし。

○二八の春の花、いと白やかにして、羅綺にも堪ねざる形容は、西施いまだ吳宮に入らず、春風先づ一朶の海棠を吹きひらかすに似たり。

○顏色艶麗にして、立ちて晩風に近けば、蛺蝶を迷はし、坐して秋水に臨めば、芙蓉を欺くの姿あり。

○玉指を撓めて琴を彈ず、其曲蕭々として雨の落つる如く、近きて之を調ぶれば、流泉の碧嶂より來るが如く、遠く之を聽けば、玄鶴の青冥より下るに似たり。

○顏ににつこり愛敬を、こゝぼせし水か薄氷、駒下駄鳴らす田圃道、晉さへ高き左り褄、小梅あたりの名取の娘、通ひ稽古の朝歸り。

○花燃ねんとして月の前にかんばしく、柳翠を增して霞の間に戰ぐに似たり。

美人

○桃顏露に綻び、紅粉目に媚をなし、柳髮風に亂るる粧、又人あるべしとも見え給はず。

○繪に畫きし小町も何とし比ふべき。歌道は其家の流に心深く、玉琴常住のもてあそび、今樣姿をうたはれしは、地下人の唇動かし、投げ節、伊勢かはり等とは格別にして、音曲さへかく豐におもしろければ、況し

て情の道、僞なくして深し。

○正に是れ月宮殿の女仙、謫せられて、遂に下界の凡胎に降誕せしにあらざれば、佐保龍田なる山神の、楓妖花精を走らして、後宮三千の顏色のあらずなりにし風流少女も是かとばかり目を驚かす。

○齡は既に玉鉾の三十あまりになりしかど、妖艶たる姿の花は今も尙うつろはで、閏三月の遲櫻、若葉に恥ぢぬ風情あり。

○一たび笑へば城を傾け、二たび笑へば國を傾く○梨花雨にぬれて朝日に映ずるが如し○芙蓉の瞼、白玉の齒○眉は遠山の翠を畫き、肌は芙容の露を凝らす○綠の鬢は厚くして雲の如し○文金の高髷は耳を蔽ひて房々し○黛を施し、紅粉を用ふ○白き首筋いと可憐なり○近けば芙蓉の綠波を出づるが如し○花の顏、月の夕、之を見る者魂飛び魄散せざるはなし○紅蓮の綠池に浴する如し○容止溫雅○坐作優美にして名姫たるに恥ぢず。

○顏は彌生の櫻の如く、雨にやつれ風に惱める風情あり。姿は仲秋の新月に似て、雲を恨み、晴るゝを遲しと思ふめり。

○膚いと素くして雪をも欺くべく、黑髮の長く句やかなるは、末央の柳かと疑はれ、舊りたる衣に、留寄南殘りて、其容賤しからず。

○巫山の神女が雲となりし面影、玉妃に太眞が院を出でし春の媚も之には過ぎじと覺えたり。

○京の水にて洗ひ上げたれば、夜の玉、人の手を經て愈光を增し、顏色の艶麗なる、いふは更なり、洛の手ぶり見習ひて、聲妙に、糸竹の技いとめでたしとぞ。

○色もうつろふ舊衣に、眞白肥膚を施ふのみ、髪も形も繕はず、素貌めでたき夏の富士、あやなき烏夜の梅の花香にあらはれつ。

美男

○編笠を掻取りたる年十八九と見ゐ乍ら、春の翠微の額髪、雪はづかしき容止は、女子にしても見まほしき、柳條の袴に風光る、黑き小袖に五つ紋、金作りの両刀は、臘塗の鞘に縹緯の糸鞆、いづれの殿の郎君かと思へど續く從者もなし。

○年は二八の美少年、顔は三月の桃花の如く、姿は秋山の丹楓に似たり正に是幽谷の鶯兒、春を待得て枝に遷り、雪中の寒梅、東風に吹れて開かまく欲するも、斯やと思ふばかりなり。

○面色白くして鬚髯青し。眉は秀で遠山の如く、眼は朗にして双星に似たり。隆準丹唇是れ此一ケの好男子。

○肌膚清らかにして、玉の如く、眉目容貌の母に優れる。卵の中なる春の唐鳥、尚二葉なる花紅葉の後の、色香を思ひやられて。

英雄

○眉秀で眼清く、色白く唇赤く、耳厚うして齒細やかに、月額の迹長く生ひたる髪黑くして髯青し。

○眉は秀て遠山の如く、眼は朗にして双星に似たり。隆準丹唇これこの一好男子、容儀堂々、庸人ならずとぞ見ゐたりける。

○臥蠶の眉、丹朱の唇、齒は瓠の實に似たる、面の色、淺黑く、髯の迹

蒼し。

○坡堤の芒花霜に枯れて、招くともなき寒風は馬の邊を避けて吹く、威風正可に凛然たり。

心琴思絃

性行

○その潔白なること光風明月の如し○恭儉にして德を守る○亭々たる泥中の芙蓉の如し○義氣秋霜よりも烈し○氣宇廣濶にしてよく人を容る○高潔明瞭宛も玻璃の如し○玉と碎くるも瓦となるを恥づ○赤誠言語に顯はる○君子は死するも其名滅びず○愼重にして長者の風あり○精密にして周到なり○正大剛毅の精神○千挫不撓の勇あり○愼沈にして大略あり○豪氣堂々、斗牛を呑む○白刃面に閃くも驚かず○砲聲後に轟くも敢て動かず○義を泰山の重きに置き、身を鴻毛の輕きに比す○氣骨稜々、神州男子に脅かず○果斷にして快刀亂麻を斷つ如し○敢爲にして勇壯○傲岸にして尊大の風あり○倨傲不遜にして人に嫌はる○恭謙の德を重じ廉恥を尊ぶ○温乎たる其容、益親を加ふるが如し○寛厚の量人をして感せしむ○薄志弱行の徒○權門に阿諛す○輕噪にして天下の笑を遺す○雷同附和するのみ○名利に汲々たり○人情紙より薄し。

○才識高遠にして羈絆すべからず○博覽强記○昂々として千里の駒の如

し○眞に天下の偉人なり○才華衆に脫顯す○鴻鵠の大志あり○沐猴にして冠するのみ○莪麥を辯せず○倜儻にして大度あり○胸襟磊落なり○膽勇にして毫も恐れず○明敏活達にして天下の牛耳を執る○凜乎として犯すべからざる威あり○威望朝野を壓す○一見人をして其聰明に服せしむ○鼻目清秀、華冑の趣あり○慓悍の風あり、

忠烈

○夫の普國の三傑を見ずや、硝煙彈雨の間に馳騁し、國內の禍亂を掃蕩し、刺客姦黨の襲擊を免かれ、精銃無前の隣敵を挫折し、遂に獨乙聯邦を統一す。

○塞外秋高うして馬肥ゑ、羯茄急に響き、鐵騎長驅せば、豆滿の水、長白の山、以て山河の固となすに足らず、黑龍江の藩鎭は南に遷り、雙頭の鷲旗は、大字形と釜山の山頭に輝き、戰艦舳艫相臨みて、良港に蟠らば神州百年の命運は豈衰心せざらんと欲すといへども得べけんや。

○正氣の凝る所、天數の然らしむる所、亞駒馬大王其人の如き英雄ありの奮然手に唾して起り、二百餘年間失ふ所の、祖宗の山河を恢復するものあらざるなきを知らんや。

○噫、人情誰か死を樂み、生を惡まんや、氣高く志遠く、國家の難を急にして、私身を忘れ、偏に報國の道を盡さんことを思へばなり、

○嗚呼、鯨鯢浪を蹴て東洋を縱橫し、豺狼食を求めて戶外に窺ふ、仰て殷鑑を見て、千載の憂に堪へざるなり。

○嗚呼、夫れ霜雪は以て、山木溪草を殺すべきも、以て亭々たる松柏の

操を奪ふべからず。

○田光は劔に北燕に伏し、公叔は命を西秦に畢ふ、果毅輕斷、谷風に虎歩し、萬乘を威慴して、華夏雄を稱す、奴輩老候といへども、豈亦志氣無らんや。

○夫れ香は、薫を以て自ら燒け、翠は羽を以て自ら傷る、志士の世に處る、寧ろ玉と爲て碎くるも、瓦と爲て全きを耻づ、寧ろ蘭柱と爲て權くるも、蕭艾となりて存するを厭ふ、況や生きて世に益することなく、死して後世に聞もることなくんば、螻蟻と何ぞ擇ばん。

○將士意高く、氣飛び、妖雲消散、匈國獨立の薫風、自由の祥雲半に靉靆し、澳都維也震動す、

○嗚呼痛い哉、百年の恩情、永訣言茲に盡矣、家人神前に聚り、香を燒

き、祖先の靈に告げて曰く、事茲に至る、亦言ふべきなし、苟も餘命を亂離の間に偷て悔いんより、寧ろ潔く國家に殉し、死して父兄をして顧慮の念を絶たしめ、以て三百年來、養成せし士風を表明する、眞に此時に存す、唯恨むらくは、我公多年の孤忠、空しく水泡に屬し、反賊の臭名を負ふを、是れ終天の憾み、海枯れ山飜るも消し難しと。

○生きて外人の奴隷となり、奄々の餘喘を鞭撻の苦界に求めんよりは、寧ろ忠義の鬼となりて、芳を竹帛に留め、名を後昆に垂るゝと孰れぞや。

○今我、決死忠義の士、數千、快健の馬數百あり、項領間隙を伺視し、主を以て客に對し、一以て百に當る亦以て爲すなからんや、諸子乞ふ努力せよ、忠義の激する處、城を背にして殊死して守をなさば、再び逆境を挽き坦途となし、疲兵を奮うて勁旅となす、豈難からんやと。

○時に陰風黑雲を吹き、海波天に漲り、砲聲遙に轟き、山岳震動す、筆を投じ、劔を拔て見れば、雲光瑩々。

勤勉

○美食前に連るとも食ふ所は滿腹に過ぎず○大廈廣くとも坐する所は膝を容るゝに止まる○產は所得に因るにあらず一に節儉による○涓滴も費す所なくんば遂に大河をなすに至る○泰山は土壤を讓らず○河海は細流を厭はず○鶴の食は胃に滿たず、而して終に千年の壽を得○右に勉め左に節すべし○小を積むにあらずば大を成す能はず○節儉は己を制するに在り○風に梳り雨に浴す○雪案螢窓、遂に美名を爲す○精を勵まし思を凝らす○胸に萬卷の書を貯ふ尙以て足れりとせず○王公將相安ぞ種あらん○天下豈に至難あらんや○勉むれば則ち乏しからず○萬里の長城は決して一日に成りしにあらず○一日の計は鷄鳴に在り○他山の石以て玉を磨くべし○勉勵は成功の母なり。

友誼

○正義の爲に混亂を排し、交友の爲に紛糾（ふんきう）を解かんと欲せば、奚（いかん）ぞ辛酸を辭することを得ん。

○蘭橈桂楫の舟、其出遊を待ち、秀標偉才の人、其談話を共にす。

○兩友姜を助けて、身を黃泉の下に失ふ、父を救ふの喜び、未だ心胸を安んぜず、友を喪ふの悲み、忽ち肝膽を驚かす。

○明月窓を窺ふの夜、空しく幽蘭を胡沙千里の中に夢み、細雨簷に鳴る

の時、徒に紅蓮を海雲萬里の外に懐ふのみ。

○迷うて而して桃源の仙妃と遊び、約せずして而して洛川の神女に遇ひ期せずして而して桃源の知己に會し、歡樂叙情、胸襟の快活、殆ど言ふべからず。

○昔者、荊軻一朝の囑に依り、身を擲て千里の强秦に入り、聶政交友の誼に由て、韓相を堂上に刺せり、是或は大義に合はずと雖、意氣の剛、交情の深き、後世をして奮はしむ。

○一たび互に心膽を吐きてより、交情豈深淺あらんや、今や或は生を捨て、孝道を盡さんと欲し、或は死を取て友誼を全うせんと欲す、之を聞くもの誰か奮起せざらんや、孔子曰く、見レ義不レ爲レ無レ勇、孟子曰く、捨レ生取レ義、と僕にして此行に從ふなくんば、平生誦する處聖賢の教に

恥づるなからんや、又何を以て、齊魯奇節の人、燕趙悲歌の士を見んや。

○今令孃が、幽蘭女史の忠孝の囑托を重んじ、正義の爲めに身を屈して姦徒を陷るゝが如き、澆季浮薄の今日に當て、或は利を見て義を忘れ、或は危に臨て志を變じ、或は時を知らず勢を察せず、偷安筆を弄し、兀座舌を鼓し、徒に他人を貶議するものゝ爲に、悅ばれざるべしと雖、余は則ち令娘の志を憐み、令娘の行に感じ、俱に力を同うする能はざるを慨むのみ。

○蓋人あり、其胸襟を吐露し、余が救護を乞ふものあらば、義氣の激する所、精神の感ずる所、骨を碎き、身を殺すも猶悔いざるべし。

○今や萍水相逢ふ盡く他鄕流離の人にして、一朝蓋を傾け、兄弟姉妹の情なり、豈奇遇にあらずや、假令世路多難、天涯離別音容久しく絶ゑ、

生死知り難きも、此交情は泯ぶべからざるなり、豈彼の富貴輕薄の徒が生死を誓ひ、黄金已に盡きて反目の人となり、質を委ね臣と稱し、人の爵祿を受け、厄運艱難に臨み、君を離れ、國に負くの輩、一場の快樂を貪り、偕老を誓ひ、色衰へて相捨て背くが如き徒ならんや、人情の尊ぶ所は信義に在り、苟も實なくんば、其れ孰れか之を信ぜむ。

○人間の交際は、只一の眞情を貴ぶのみ、我眞情を以て交を求めば、誰か信愛せざるものあらん、眞情を以て交を求め、而して彼、吾を愛せざれば、是眞に親交の意なきなり。

○蹄水の一別、杳として音容を絶つ、君は東流の水の如く、妾は路傍の花に似たり、金針海に落ちて出づるに期なく、消息通ぜんと欲して終に由なし。

○春風吹テ水潺々、白雲散シテ月團々、室ニ有レ賓ヲ臭如レ蘭、坐ニ有レ朋ヲ吐レ心丹。五絃彈シテ情歡、悲歌唱テ髪衝レ冠、乘シテ風雲ニ兮冲ニ九天ニ、潛龍躍テ遂ニ胡淵ニ

慷慨

○此土燕丹に別れ壯士髪冠を衝く○眦裂けて朱を濺ぐ○憤恨禁ずる能はず○心腸爲に寸斷の思あり○悲憤の狀さながら夜叉の如し○嗚咽歔欷して口言ふ能はず○口角爲に顫ふ○赫然として怒り勃然として色を作す

爭鬪

○上を拂へば身を沈め、下を拂へば飛び上り、右に開き左に避け、斬込處をかいくゞり、或は蹴倒し踏飛し、手當り次第の人つぶて、ばら〳〵

と投散じ、閃めく電光、波上の燕子、類稀なる早業なり。
○寄せては返す太刀音、かけ聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風登り二龍青潭に戰ふ時、沛然として、雲起るも、かくぞあるべき。
○勇士と勇士の烈しき太刀音、丁々はたと淀みなく、受けては流す瀧の糸、風の柳に三日月の、左右に紊れて狂へども、亂れぬ拳は武術の精妙二龍雲間に鬪ふ時、雨金鱗を降らす如く、兩虎深谷に爭ふ折、風黄毛を吹に似て、迭に疎鹵はなかりけり。
○手早く腰刀を拔て、水車の巡る如く、振り廻はしければ、晃々たる光は雲を貫く稻妻の如く、颼々たる音は梢をならす暴風に似て近くべくもあらず。

戰爭

○沈深にして將略あり○寛厚にして善く衆を御す○號令嚴明○勇氣三軍を壓す○驍勇にして善く鬪ふ○部伍整々○士氣自ら百倍す○轡を緩くして徐行し、神色自若たり○撫するに恩威を以てす○遠近心服し、來り屬する者甚多し○將士と甘苦を同うす○奇謀をめぐらして屢敵陣を陷る○機に應じ策を決す○神出鬼沒○旭旗の向ふ所披靡せざるはなし○武力絶倫、向ふ所皆披靡す○民舍を燒き陣を布く○身士卒に先つて疾く馳す○馬に策ちて進む衆之に從ふ○壁を堅うし野を清め以て待つ○一戰以て鏖にすべし○營を出て突擊す○諸軍鼓譟して進む○鉦鼓の聲數十里に聞ゆ○山岳爲に震ふ○旌旗天を敝ふ○旗幟林立す○將士皆奮ひ戰はんとす○滿目皆兵にあらざるはなし○夾みて之を攻む、一戰以て破るべし○計を先にし戰を後にす○長驅して進まんとす○騎を縱ちて之を擊つ○間道よ

り之を攻む○虚に乗じて掩撃す○腹背皆敵なり○縣軍萬里○伏屍野に満つ。

○嶺には白旗赤旗、深山風に吹きなびかされて、雲か花かとあやしまる。麓には數千の官軍、兜の星を輝やかし、鎧の袖を連ねて、錦繡しける地の如し。

○東西の山の木蔭より、菊水の旗二旒、松の嵐に吹きなびかせ、閑かに歩を歩ませ、煙嵐をまきて押し寄せたり。

○天にかゝる日月も誰が爲にか明かなることを耻ぢざらん。心なき草木も是を悲しみて、花咲く事を忘れつべし。

○血は流れて大地に溢れ、漫々として洪河の如くなれば、屍は行路に横りて累々たる郊原の如し、

○をめき叫ぶ音、山をひゞかし、馬の馳せ違ふ音、雷の如し、大刀長刀のひらめく影電の如し、組みて落つる者あり。矢に當りて死す者あり。指違へて伏す者あり。疵を蒙りて退く者もあり。

○敵兵雲の如く起り、雷の如き聲して、打出す玉は雹の如く、前に傷くものあれば、後に斃るゝものあり。

○旌旗の風に翻りて靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劔戟の映じて輝ける有様は、曉の霜の枯草に布けるが如くなり。大軍の近處には、山勢是が爲に動ぎ、鬨の聲の震ふ中には、乾坤須臾に摧けんとす。

○草の原より出づる月は、馬鞍の上にほのめきて、冑の袖に傾けり。尾花が末を分くる風は旗の影をひらめかし、幌の手静まることぞなき。

○浦風になびく白旗は、磯馴松にかゝれども止まらず、水際に維ぎし戰艦は、舳先を並べて數ふるに遑あらず、馬は熟れて水を恐れず、人は勇みて敵を遲しとす。

○幡幟は曉風に翻り、錦眉尖刀は朝日にかゞやく、人は鎧の袖を連ねて兜の星に明る天をうち仰ぎ、馬は眞紅の總を垂れて、轡の音と共に嘶く。

盛衰

○祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅桑樹の花の色、盛者必衰の理を現はす。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ、偏に風前の塵に同じ。

○何も皆變りはてゝ、稀に殘る家は、門前草深くして庭上露茂し。蓬が柚、淺茅が原、鳥の伏所と荒れはてゝ、虫の聲々、うらみつゝ、黄菊芝蘭の野邊とぞなりにける。

○見しに變らぬ我宿も、柱傾き軒落ちて、屋根まで茂る草の花、雲を隣の柴垣に、手づから植ゑし庭の松も、秋風高くなりにけり。

○出るにも入るにも、前驅後從のいかめしきに冊かれ、桂を量りて炊ぎ玉を數へて食ひ、富貴両ながら得たりしも、今は一炊の夢と覺めて、變らぬ者は海と山とのみ。

○或は聖主臨幸の地なり、鳳闕空しく礎を殘し、鸞輿唯跡を止む、或は后妃遊宴の砌なり、椒房の嵐の聲悲しみ、掖庭の露の色憂ふ。

○綺羅充滿して堂上花の如く、顯貴群集して門前市をなす。楊州の金、荊州の球、五金の綾、蜀江の錦、七珍萬寶、一として缺けたる事無し。

○洲崎に噪ぐ千鳥の聲は、曉うらみを增し、磯間にかゝる櫂の音は、夜半に心を痛ましむ、晴嵐膚を侵して翠黛紅顏の色やう〳〵衰へ、蒼波眼を穿けて、外土望鄕の涙抑へがたし。

○あはれなる哉花に喩へし十善の御粧、無常の風に匂ひを失ひ、悲しい哉月にかゝやきし萬乘の玉體、蒼海の浪に影を沈み御座す事を、無常元來定めなし、有待誰かは頼みある。

○三界廣しといへども、五尺の身置き所なし、一生程なしといへども、一日暮し難しとて。

○天に住まば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とならんと、天の星をさして、さしも御契淺からざりし建春門院、秋の露に犯されて、朝の露と消らさせ給ひぬ。

○昨日は雲の上にて雨を下す神龍たりき、今日は市廛の邊に水を失ふ枯魚の如し。禍福道を同じうし、盛衰掌を反す今眼前にあり、誰か之を悲まざらむ。保元の昔は春の花と榮ゑしかども、壽永の今は又秋の紅葉と落ち果てぬ。

○昨日は東關のふまとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波の上に纜を解きて七千餘人。

○鳳の甍は天に翔り、虹の梁、雲に聳ゐ、さしもいみじく造り雙べられし大內裏、天災を消すに便なく、回祿たび〳〵に及びて、今は昔の礎のみ殘れり。

○昔は九重の雲の上にて、春の花を弄び、今は八島の浦にして、秋の月に悲ふ、凡そ明かき月を詠めても、都の今宵如何ならむと思ひやり、涙

を流し、心をすましてぞ明し暮させ給ひける。

○げに薤山の朝露晞易くして、黄公の酒壚永く愁を添へ、鳥部山の烟常に絶ねずして、北邙山上、唯松柏の聲を聞く、あはれ人世は夢か幻か、一犁の春雨に油々として萠芽し、一陣の秋風に蕭々として搖落す、非情の草木だに天地消長の氣運を免るゝこと能はず、紅顔よく幾時ぞ、黄粱一炊夢は忽ち邯鄲の枕に破れ、榮華一瞥、魂は空しく黄壤の山に迷ふ。

○人も住家も變れるが多く、常に遊如とせし山守の家もなくて、麻畑にてありし處は、却りて人の家居となる。若菜摘みたる野も、落凹みて沼となり、螢追ひたる澤も、水あせて岡となれり。

○錦の茵、玉の床、何一の不足なく、暴らき風にすらあたり給はぬ御身なるに、奸臣佞者の爲に、世を狹められ、かゝる貧家に忍ばせ給ひ、粟

の飯、橡の粥、僅かに御命をつなぐのみ。

○門あれども扉なし。庭に立ち入り給へば、人跡絶えて苔深し、池の邊を見廻せば、秋の山の春風に、白波頻に折りかけて、紫鶯白鷗、逍遥す。興せし人の戀しさに唯盡せぬ者は涙なりけり。

戀　愛

○舊りにし事と聞くからに、比翼連理の契りさへ、花に風のなさけなや更に別のなかりせば、千代も人には深ひてまし。

○菜種に獨り蝶々の、夢とも分かで、道芝の露の涙のかこち草、殿御も忘にや狂ふらん。

○ふけて寢る夜の閨の戸を、たゝくは夏のくひなか、打つとは秋の小衣

か。

○霞む梢の移り香散りて、花や戀しき俤を、颯と吹き解く春風に、霞がうめる初櫻。

○つがひ離れぬ鴛鴦の、中にさす月、すご〳〵と、別れの辛さに袖しぼる。

○頼む詞も後や先、たゞ恥しさが先きに立ち、心で思ふ半分も、口で言はれぬ、おぼこ氣の顔に照りそふ薄紅葉。

○待つ人の來ぬも恨みの露しぐれ、置くは尾花か女郎花。

○夕暮近き野路の雨、思ふ郎と相合傘の、人目稀れなる、横頰吹、濡れぬ先こそ、今はしも厭ひはせじな、百年の露の命よ、君が爲には照る日の岡も數ならぬ、雨は今宵の媒妁と、思へばうれし傘の柄の、手に手を

やをらとり部山。

○眼にはそれぞと知らせても、言ひ遲れては縺れ髪、亂れし鬢を搔き上る、櫛さへ憂を黄楊かねて、いすかの嘴とくひ違ひ、心の願ひ、こらへ兼ね、又恥かしき惚恍氣の男の方へ背を向け、雪より白き襟元を見せてうつむく愛らしさ。

○つぐる便りも有磯海の、浪のよるべや渚漕ぐ、蟹の小舟の楫をたゞ、親も許せし戀人を他所の湊へ寄せはせじと、胸のみ騷ぐ磯馴松。

○元來女子は水性の移るに易き彩糸に、月下の翁や結びけん、いなにはあらぬ稻舟の、最上の川にあらねども、我身一つを堰きかねて、誘ふ水にぞ誘はるゝ。

○別れし日より滿一年、小鹿の角の、束の間も、忘れぬ御身に、今日此

郷で御目にかゝるは優曇華(どんけ)の、春待ち得たる心地して、歡で居る者を、此まゝ別れて行かんとは。

○我夫は彼處にいますめり、此所より軒は見ゑ乍ら、川一條を萬里の灘かく迄思ひ沈む身を、逆さま事なる怨の數々、罵られても、擊たれても、仇には受けぬ郎の拳。

○妹背の緣は出雲にて、神の結ばせ給ふと聞く、迭ひに胸を打ち開けて正木の蔓末長く、通はせ給はん事をのみ、祈るより外はなき者をと。

別離

○今逢うて今別れなば、再會絶ゑて圖り難き、母が悲しさ如何ならん。若し訪はれずば、かく迄に、物は思はじ思ひはせじと、世を怨み、身をはかなむ、言の歎きは今日のみならで、雨の朝、月の夕、善しにつけ、惡しきにつけ、忘るゝよすがはあらざるべし。

○再生の恩、知己の義を、述ぶるひまなき辭別(いとまごひ)、猶豫して人に知られじと、思ふ心の急がれて、詞短き秋の日の、暮れて隈なき月影は、しのぶに便り蘆垣の蔭に添ひつゝ出でゝ行く。

○さらばと計り、いとま乞ひ、はや椽側より下り立て、刀を腰に、草鞋の紐を結びて出て行けば、名殘り惜しやとばかりに、見送る夫婦は柴の戸の、邊にしばし佇みたり。

○雲も愁ひて別離の悲みに似たり○風も悲みて痛悼の念をなすが如し○行く者は千里故郷を思ふの情切なり○征馬嘶きて行人家を出づ○離情綿々として遊子の心をひく。

○路の行手の夏霞、引き別れつゝ遥かなる、天に聲する舞鶴、歸さ忘れて子や鳴かん。心も知らず、人やいざ、今こそ罷れ、田に畔に、麥の初穂にすらしたる、袂露けき旅衣。

○歡ばしさと悲しさの、胸にせまりて降り落つる、涙は千條の瀑布の糸せぐり苦しき憂き別れ、なごり惜しげに伸び上り、伸上れども、かきくもりて、目さへ霞の春知らぬ、虫も音に鳴く秋の風。

○袖いまだ乾ぬ旅衣、たつとしなれば水鳥の羽音も寒き霜月の、二十日餘りの朝開き、沈む月影浮む身も、西と東へ別れ路と、いとゞ惜ませ給ひけり。

○打寄する波はかへれども、歸らぬ人を思ひわぶ、數行の涙やるせなし。實にや悲しきは、死して別るゝ今般より、生別れこそ悲しけれと、昔の人の云ひけんを、我身一つの秋にして。

祝賀

○千里の行も一歩より始まる○君棟梁の才を以て此任に當る○重きを負ひ遠きを渉るに地を擇まずして休するが如き陋躰を學ぶなきは人の知る所なり○水滴りて石穿つ○一日一錢千日千錢主家を凌ぎ餘風此に至る事小なりと雖も等閑に附すべからず○誠に閭村人民の幸福思ふ可し○韓非子に曰く千鈞も船を得ば則ち浮ぶと君愈々練熟の健腕を揮ひて盡す所あれ○聊か古人を引て賀中の一戒となす○君の校に入り手足胼胝以て其勞に服せよ○星を載せ月を載せて勞苦するもの少なし○盛名遠邇に聞ゆ尚ほ敦行怠らず○青雲賢者の道を避く○濱海清澄として毫も汚塵あること

なし○農は國の本、本固ければ末安し○鞭歩雪虐の功空しからず○彭祖の壽貌ある實に欣祝に堪へたり○嗚呼君の其本を忘れざる恰も胡馬越鳥の本を忘れざるが如し○余之を聞き欣躍履齒（喜ビノ爲下駄ノ齒ガ折ル）の折るゝを知らず○晏子春秋に曰く衣は新きに若くはなく人は故きに若くはなし○天眞の躰驅を健全にし勉勵の美火をして爛熳ならしむるの榮名を顯す○朱子曰く「陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成」と君憤興以て自警自重せよ○春風雨露の慈育を施し此校に入るの子弟は能く學業に勉勵從事し日に就り月に長ず○政界の燈臺となり光輝を萬里の外に放つ○君が鋭意事々從はんとするの意氣、長鯨躍り大鯢舞ふも君に於て何かあらん○敢て數語を陳し謹で盛事を頌す○我輩歡喜の情默止する能はず聊か詹々の言を述べて祝詞とす○蕪辭を顧みず孟浪の言を述ぶ。

○時勢の開明は以て文運を助く可く文運の隆盛は以て開明を賛く可し○蓋し開明と文運とは相持たざるを得ざるなり○今や我邦聖世を御し群賢朝に滿ち鄕里をして盡く學校を設け子弟をして皆學に就かしむ○茲に吉日を卜し開校の典を擧ぐ今日の學徒書生幸に開明の盛運に遭遇するを得たり○苟も能く斯校に入り黽勉止まざれば則ち他日朝に立ち大業を經綸し治効を咸熙に奏する蓋し又難きに非らざるなり○他日必ず棟梁の校と成らん○向來必ず家を興すの器と成らん○諺に言ふ水清ければ魚住まず人は多少混濁の渦中に投ぜざるべからず○童子七才就學の齡に達すと雖も未だ自ら進みて學途に就く心なく而して又父母之を家庭に敎養する能はず是に於てか學校に送り群童と交り一敎師の下に監督を托し學業の他に修身の道を知らしむ然らば復た學校は修學以外に道を修め身を修むる

に於て甚だ益ありと謂ふべし而して兒童は漸く此時より父母の膝下を離れ世事を觀察するの緒を開く○俊才の淵叢と爲る○俊良を出すの淵源とならん○西諺に曰ふ小兒は大人の父なりと未來我第二の日本に立ち大業を劃策し國家を隆盛ならしむるは實に小學及び中學生徒の兩肩に在り○茲に黃道吉日を卜して合衾の禮を擧ぐ○天良緣を下して關雎（夫婦ノコト）の歡歌ふべし○桃夭の偶（ヨキ夫婦）○天に在りては比翼の鳥と爲り地に在りては連理の枝と爲る○夫婦偕老同穴を契る○家道茲に榮もるの吉瑞○家門多祥の基○黃髮龜鶴百歲を期す○積德報い來りて茲に米壽の域に達す○壽は滄海の如く天成の玉骨尙壯者に似たり○自ら安閑を愛して世塵を脫す○老來閱し來れば樂事多し○老餘分を樂み琴書を友とす○双鳳共に棲む七十年○華燭の典を擧ぐ○五雲靄々として景福淸なり○髟丘は銀に似て齡

は大椿に伴ふ○鳳雛（ヨキコ）を產す○西池の金母紅雲を駐む○鳳占吉に協うて人倫の大儀を擧ぐ○男女室に牢（響應ノコト）を共にして食す○關雎の好、人の羨む所となる○夫れ宗弘、德敎の二字遂に國家の寵臣たるに及び糟糠の妻を堂より下さざりき○嗚呼艱積中にありて辛苦を共にし散樂の時に際（あた）りて快樂を同うす復是れ世人の仰羨敬慕する所ならん○天休（テンノサイハイ）滋（しげ）々至る○群禎の見（あら）はるゝ必らず從來あり○蘭の維れ馨ばしきが如く松の盛なるが如し○舜の孱嫂に於ける禹の鯀（こん）に於ける如きは姑く論ぜず○其積善の餘慶にあらざるなきを得んや○男女室に居るは人の大倫なり○故に男五々に至れば其匹を擇び其族を撰みて親づから迎へ娶る則ち禮なり○其人となり椿萱に事ふるや孝順にして其昆弟に處（おる）るや愛育を以てし糠慨忠君の志氣恒に眉宇に溢充す○一男子を擧ぐ幼にして岐嶷異鱗其嬉

遊する所を見るに天上の麒麟兒たる風采あり○茲に友人相會し共に村釀野肴を以て祝杯を擧ぐ○筵席匆忙筆を奔せて之を貴下に致す○國の分子は村落なり○村長賢なれば一村皆賢なるが如し。

貧富

○不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し、妻は床に臥し兒は飢寒に叫び、經營慘憺、意匠凄疎○園遊會○舞踏の宴○破れたる褞袍を着○星の眼界を去らざる頃より夕べの暗きに及ぶ迄○富人の汚點は金にて拭ふ○貧すれば鈍する○朱檀の床柱○大厦廣屋雲表に聳ゑ○貧は爭ひの源なり○陋巷膝を容るゝの餘地なき處に於て、夫妻寒に泣き、親子餓に叫ぶ○日月の働きに苦情を言ふものは生涯貧乏を免る能はず○稼ぐに追付く貧乏なし○紅粉を粧ひ、綾羅を飾り○石門鐵柵、整然として溝渠に映ず○瓊樓瑤閣、巍然として雲に聳ゑ○貧人の負債は大聲を發す、○富を致す可き方法は頗る多し然れども十が八九は汝の屑とせざる所ならん○富を蔑視する人は概ね之を得んと試みて失敗を執りたる者なり○草根木皮を嚼んで、僅かに一日の飢餓を防ぎ○明日粥食の貯へなく、夏冬換ふるの衣なし○如何なる賢者なりとも赤貧身を洗ふに至りては亦愁者の如くに見る○貧人には却て誠實多し○茅舍大に破れ、雨は庇廂を徹して疊を濕ほし、月は破窓を穿つて坐敷を照らす。

疾病

○病瘦せて最早ながらうべくもあらず○僅かに括り枕の頭を擡げて○病

已に膏肓に入り如何なる醫師も匙を投ぐ○剩へ疫病うちそひて、增るやうに跡方なし○世の人皆飢ゑ死にければ、日を經つゝ窮り行くさま、少水の魚のたとひに叶へり○皮乾き肉墮ちて唯だ依賴するは藥餌のみ○二豎威を逞うし、軀躰稿然として、僅かに瘦骨の褥床に苦吟するのみ○軟弱蒲柳の身は常に、藥鐺の傍らに吟呻す○蕭條たり、只だ秋夜杵聲の枕邊に響くを聞く○病の身に於ける、蟲の艸に於けるが如し○宿痾再び發して五体調を失ひ○煩の肉いたく落ちて白き面はいとゞ透きとほる○病勢次第に重くなり行きて朝餐すら喉に下らず○愁人、夜の長きを苦しみ○病床の上に枯瘦の躰を支へて唯だ藥石の奏効を俟つ。

無常

○朝に死し夕に生る習ひ、唯水の泡に似たり○今年花落ちて顏色改まり明年花開きて復、誰か在る○松柏摧けて薪となる○北邙山下の塵と化す○身のかひなきを嘆くのみ○妻は孤雁の友に遲る○斷腸の涙○暗夜に燈消ゑたるが如し○憐むべし薄命の婦○常夜の暗を辿りつゝ○黃金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えず○土墳數尺の草○恨を天邊の月に添ふ○別を夢裏の花に慕ふ○鳥鳴きて徒に挽歌の響をそへ、松咽びて哀慟の聲を助くるのみ○萬年樹の花、無情の風に隱ふが如し。

○朝に死して夕に生るゝ習ひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、何方より來り何方へ去る。

○人も恨めし、世もあぢきなし、人にも世に白雪の、千里に重なる山の奥、谷の處に遁ればや。

○北邙山下の塵となる、人の命は朝霧の如し、風の待つ間と知るや君。
○春の夕暮訪ひくれば、滿地の落花、砌を埋め、甍は落ちて苔青し。
○淵瀨定めぬ世の中は今日さへ知らぬあすか川、流れの末は如何ならむ。
○老少不定と聞く時は、若き命も賴まれず、老いしも殘る世の習ひ、飛花落葉の理や。
○人の命は春の夜の、只手枕の夢の間や、夜半の嵐に散る櫻。
○今年花落ちて顏色改り、明年花開きて復誰か在らん。悲風吹きて清華の夢を尋ね、霓裳散りて羽衣空し。
○寂寞たる空山の裏、鳥啼きて日既に暮る。土墳數尺の草、一徑涙盡きて愁未だ盡きず。
○青塚苔滑かにして、石泉纖々と流れ、白楊早く謝して落葉離々たり。

○喜ぶ甲斐もなつの野の草葉の露と消え果て、早や夢の間に七七日、露げき秋とぞなりにける。

弔祭

○人の食を食むものは人の事に死す○天下其節を高しとす○知りて言はざるなく、言ひて盡さゞる無し○人誰か死なからん、死して名を傳ふ何の恨か之れあらん○清酌庶羞の奠を以て祭る○清酌桑盛を具へ虔みて吾が孚を薦む尙くば饗けよ○今や外交多難、民力日に疲れ、國家百年の長計未だ立たず、吾等果して君に耻づるなき乎、嗚呼丈夫の魂は宜しく丈夫の魂を以て祭るべし○故友位を設け旨酒庭に芳し、英靈髣髴、來り饗けよ○天下の憂に先ちて憂へ、死して追悔なく、天下の樂に後れて樂む

其人何にか在る○地を拜して私淑し、天を仰ぎて德を憶ふ○聖明、上に在り恩、枯骨に及ぶ○君、藩府に在れば乃ち藩府の職に稱ひ、朝廷にあれば乃ち朝廷の職に稱ふ○小官に居りて鄙とせず、大官にありて驚かず○一節六十年、盖し一日の如し○嗚呼、吾の君に於ける恩誼父師の如し○俯仰、今昔の感に堪へず、往事を歴陳して英靈に告ぐ○塵世の流轉究りなし、誰か其究極を知らむ○一朝目を閉づれば萬想空寂○君、世變に處して斡旋周密、策遺算なし。

○慰撫すかして諸人が、亡骸送る鳥部山、かへらぬ道の花櫻も、夜の嵐の吹くぞとは、思へど有繋さとられぬ、無常の風を身一つと、思ひ惱みし花曇り、晴れぬ歎きに袖濡れて、辿りかねたる孤子が、手を曳き心慰めて、連立里の手ならひ子、哀れを添へし野送りに、濡れぬ袂は無かりける。

○はや香華院に來にければ、准備の樒を携へて寺門に入つ憤塋戸なる手桶索ねて汲揚る、阿伽井の吊桶綆弛み、漏てはいとゞ袖濡す歎きの露の雛歎と、外の卒塔婆も偲るゝ、憂事聚ふ身一つの、心盡しをいへばえい卷柏ならぬ雨后の苔、洗ひ流して手向の水に、うつれる影もなき人の、名をのみ遺す石塔に、うち對ひつゝ顧づきて、回向に時を移しけり。

悲哀

○かゝりし程に。定業の時來りけん彌生の上旬、彼岸櫻にあらなくも、最恨めしき花七日、其夕暮の入相に、鐘もろともに散て行、あはれに果敢なき事ぞかし。

○狩場の野鷄の雄を慕ひ、柯に離れし蓑蟲の、父よと鳴けど慰むる、よすがも絶て夏の日の、長きにいとゞ暮し難、身は打磬蟬のから衣、乾かぬ袖を片布て、住つかぬ宿は水無月も、秋風早く立にけり。

○啼音憚かる白晝の草花、唧つや袖の露乾して、泣貌人に見とられじとなほす化粧も朝霜の、解けて落るは涙なり。

○變り果たる形狀を、見るより胸先塞りて、諸聲立てよゝと泣、袖よりの夕時雨、霧間は絶て無かりけり。

○悼しさよと聲立て、音に啼ぬ悲しさの、胸に通りし憂き涙、しぼるに餘る袖袂、身も浮くばかり泣たまふ。

○折しも聞ゆる山寺の、鐘に無常を告渡り、黄泉に誘ふ夜嵐に、末期の水も取敢ず、溢れてもなき苔の露、巣の時鳥血を吐きて、啼力さへ若鳥の、母に取つく麥鶉、根にかへる花、雲に入る鳥も哀れを鳴きそへて、親子一世の別霜、きゑて墓なくなりにけり。

星影鐘聲

天地

○蒼天○蒼穹○普天○有明の空○天の川○雲井のよそ○朝光碧天にたゝよふ○赫々たる炎天○豐榮のぼる日○夕日うらゝか○日落ちて半江紅な

り○行雲日光に浮ぶ○林外晨光動く○曉の星○北斗七星○軒端をつとふ星の影○殘星幾點○皎々たり河漢女○山は月を吐き、渚は星を澄ます○五百重の雲○雲を拂ふ○秋雲の浮沈に對す○野雲低く水を渡る○雲心なくして岫を出づ○山月猿聲を照らす○白雲跡を埋め青嵐夢を破る。○靡靡一聲○膏雨○驟雨○殷雷○雨落て花涙を含む○細雨紛々○殘雲尙雷聲あり○疾風乾坤を動かす○野風○袂涼しき風○遠山おろし○砂を卷き石を走しらす○微風水を度り水紋を生ず○春風氷を解く○涼風荷葉を傾く○峯の嵐か松風か○鳥風に乘ず○酒旗の風○五日一風、十日一雨○吹きすさぶ木枯の風○雨の脚、横さまに騷がしう吹く○嵐さと吹き入りて身に染む○雲晴れて風に力なし○霞彩輕烟淡々たり○水烟晴れて江月を吐く○花の朝、月の夕○夜は月を載き朝は霜を踏む○月在りて尙夜かと疑ふ○東窓朦朧たり○曉風髮を吹く○霜月夜寥々。

月

○時に蒼海沈々として日西北の波に沒し、雲山迢々として月東南の天に出づれば、漁船の歸る程見ねて、一燈柳岸に幽かなり。○月は半輪の雲もなく、山には萬樹の影あり、瀨々たる水の音、颯たる松の聲、腸を斷つ媒なるに、鹿は尾の上に鳴きて、白露の霜となるを悲み、猴は幽谷に叫て、孤客の夜衾を寒からしむ。○會々秋月の皎然として浮び出づるや、之に映じて、熒々たるもの更に反對して、一層の清輝を添へ、矢矧の花崗岩溪谷を照らして、千里萬里の古戰場に映し、笠置の花崗岩峽に入りて、元弘帝蒙塵の故趾に輝き、

湊川兩岸の花崗岩沙に反對し、嗚呼忠臣墓臺の花崗岩に反對するに到りては、蹕厲跌宕なる眞に言ふべからす。

○山遠く、月小に、滿林の白露月光に映じ、燈火三點水外に明かなり、微風時に起りて瀾漪月影を碎き、秋樹蕭條として、落葉舟邊に漂ふ。

○月星明朗晝の如く、柳影地にあり、萬戸閒寂、人馬聲なく、仰て月中を望めば、飛雲忽ち動きて嫦娥光を斂め、斗柄低く垂れ、金露天に滿つ。

○雲海茫々として青天已に暮れなんとす、孤島に夕霧隔てゝ月海上に泛べり、極浦の波を分け、潮に引かれて行く舟は半天の雲に遡る。

○前には海水瀁々として、月眞如の光をかゝげ、後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る。

○長安一片の月、萬戸衣を擣つの聲、秋天星高うして銀漢淡く、梧桐聲寒うして露團々、遠征の英雄は洛陽の空を仰で歎し、蠻地の照君は行雁を羨みて鳴き、羈旅の學生、暗燈に聲を呑み、寡婦は孤衾に腸を立つ。

○茜刺日も入りはて、杣人の斧の響絶ねて、端山の峽より月さし昇れば、そがひの峯より落る瀧つ瀨は、黃金の色の絲ひきはへたらん如く、岸に碎くる水は、白玉をこき散らすかとぞ疑はる。

○月ばかりこそ、世々の人を照し來て、今にあれば、古人の形見ともいふべけれ、されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影の映るやう覺え、月は言はねど語るやうにも覺ね、忘れては、昔の事を問はまほしく思ふぞかし。

○月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影をうつるやうに覺ね、月はものいはねども、語るやうに覺ね、忘れては昔の事を問はましく思

ふぞかし。

○月出でゝ山の峯に立ち續きたる、松の木の間のけじめ見ていとをもしろし。

○月のいと赤き夜、神の社にまうでたれば、木の間より洩る影に、黒木の鳥居、赤の玉垣など見わ渡る。

○月もなぎ、波靜かなる海づらを、くまなく月の照り渡り、をちの島根のさやかに見わて、いはん方なく面白し。

○宵過る頃より雨も止みて、洗ひ出せる月影、いとさやけし。

雨

○夕を送る鐘の聲、雨に曇りし遠樹の蔭○若葉に濺ぐ雨の音○軒端もる雨に夢覺めて○霞より降る春の雨○更に色ます春の雨○朝の雨に櫻の露重み○沛然として雨來り光景慘憺たり○白雨車軸を流し、飛霧衣袂を濕ほす○密雲油々として蒼天に漲る○春雨霏々として四山に滿つ○點滴軒を繞りて聲琴瑟の如し○凉氣掬すべし○急雨瀟々として晩凉をなす○物を濕ほし細にして音なし○輕風一過、沛雨到る○細雨霎々として連日晴を見ず○細雨疎々、烟は軒を繞りて罩(こ)む。

曉

○蒼空雲なく、天色拭ふに似て、燦爛たる晨星、漸く耀輝を失ひ、曙光遍に東天に發す、曉霧は尙ほ平野に横り草頭零露多し、既にして旭日の上るに從ひ、野禽天樂を空中に奏す、原上の光景恰も畫圖の如し。

○暫くして東天の微紅は益大きく、また益濃く、空に浮べる雲に映りて雲は皆錦繡となりぬ、四面なほ夜色の中に眠りて、東天獨り活動を見る一刻は一刻よりも異に、雲又形と共に其色を變じ、殆ど端倪すべからず紫味漸く黄味に移りて、曙光今は東方の半天を傾す。

○山の端の月落ちて、朝日なほ東山のかなたにたゞたひながら、早くも空にほどばしれる光鋩に射られて五形の錦の幕をかたどれる一幕の曉雲の上に、屏顔うるはしく顯れ出でたる月光山。

○曙々たる鷄聲に喚ばれつゝ、三尺の窓を開けば、當面の玉芙蓉、曉風衣微の裡に嬌として揖するが如く、相對して先づ佳朝を默愛す、氣味清迥、神一往して魂もまた紫翠に染む。

○朝日子のかげ、麗かに海上射てければ、さすが深かりしも霧も、やう

やう晴れそめて、かしこには山を畫き出し、こゝには船を寫し出し、林とまがひし檣、鳥と見ゐし人、今はあらはになりもて來たり、見る〳〵天然の好山水とはなりにけり。

○若し夫れ曉色微茫、水蒸氣は滿天に縹緲して大海の如く、堂塔、殿閣層樓、其間より隱見斷續し、時に鐘聲（上野か淺草か）殷々として此大海中より迫り來る、既にして曙光は、水蒸氣の間を透し來り、宮城の粉壁先づ紅を抹するや、頃刻萬變、三十萬の人戸一時に現出し、人をして坐ろに蜃氣樓を眺觀するの感あらしめ、芙蓉萬仞、亦莞爾として半空に霽はる。

○里をすぎ村を行くに、大かたはまだ起きず、鳴き殘の蟲の聲こゝかしこ聞ゐて朝顔ひとり人まち顔なり、寺は何處ぞ木魚の遠く響き來るは。

○やゝ程經る程に東方の山花やかに打ち匂ひて、野末の露まづ消ね行けば、立ちこむる白雲も、やう〳〵分れ行きて、蜿蜒たる葉山しげ山の、かず〳〵あらはるゝに、やがて玉芙蓉の絶嶺、縹渺として、雲際にほのめきてそめぬ。

朝

○山遠くして雪は行客の跡を埋め、遙に見れば群鴉、塒を離れ、東西に飛び去る、曙の風情いはん方なし。

○旭光僅に水を離れ、光輝粲として細波に映じ、朝霧滿々たり。

○殘月斜に樹梢に懸り、宿鴉一聲天將に曙ならんとす。

○嵐吹き來りて身に染み、池の蓮は一聲高く蕾を破り、露の光りは珠の

跳るに異ならず。

○曉告る鐘の音に、起きて眺むる庭の面、垣根に咲ける朝顔の色いと美し。

夜

○日纔に沒し、清光一條林間を透し、長芒引いて湖心を射る、顧見すれば、月已に臺麓に出で、高柳低荷辨ずべし。

○をりしも、夕日西の山の端にかゝりて、雲の夕ばねいと花やかに、やう〳〵彼處より蔽ひ來る夕ぐれの袖は、なべてをちかたの野山をつゝめば、今は限と二ひら三ひら散り行ける花を戀ふとや、遠山寺の鐘の音ものすごく又あはれなり。

○日は西山に入りはてゝ、遠方の鐘の、ほのかにひゞく音さへうち霞みつゝ、鶯のねぐらにいそぐ夕ぐれ、ひとり暮れんともせぬ花のかけにつくゞと眺め居たるに。

○已にして夕陽林梢にあり、落霞飛鳧、垂柳疎松の間に閃々として、長流滾々、潮滿ち石鳴る、西に芙蓉を仰ぐ突兀萬仞、東、波山を瞻み、翠鬟拭ふが如し、又宇内の絶觀なり、

○夕日かげ落ちて、薄霧かゝる遠近の森、誰が爲にか錦を織るらむ、すゝきかくれの葉屋には、夕飯すゝむる妻一人待てり、

○夕陽西山に春かんとするや、餘照は暮雲に掩映して五彩色をなし、殘烟は沈まんとして尙樹梢に棲む。

○夕陽落ちんとして天色紅を彩り、光茫長く引きて晃々波心を射る、波

渺々響鰭々、小焉ありて水烟四に起り十雨の暮色遠きより來る。

○夕陽漸く傾きて萬道の毫光海心を射、朱浪狂ひ錦鱗躍る夕ばねのげしきいとまばゆし。

○夕蔭はやう〳〵しげくなりゆけり、鋸山を始めとして、長く眉づみの如く横はるたる遠山は、皆一つ色に薄霧につゝまれ中腹の松の梢より、むら〳〵と登りたつ白雲のみ、唯きざれなく見ね渡りたり。

○紅輪低く墜ちて、玉鏡將に明かならんとす、遙に觀れば樵子歸り來り近く視れば紫門半掩ふ、僧古寺に投むあれば、疎林に擾々鴉の飛ぶあり客孤村に奔るあれば、斷岸に嗷々犬の吠ゆるあり、佳人燭を秉りて房に歸り、漁夫綸を收めて釣を罷む、點々たる流螢行露を照し、粉々たる宿鷺莎汀に下る。

○夕月の殊更に新しく、みがき出でたれば、はや雨の名殘もなし、堤の花いかゞあらんと、漕ぎかへし見たれば、その頃は人もなし、櫻の木の間に、ほの〳〵と月の見わたるは、我が爲めに、つくりなしけんと、思ふ計りなり。

○夕陽西に移り、山峽の影すさましく鳥の聲幽かに物凄き、夕の空もほの〳〵と月になりもく。

○日もはや西に入り果てゝ、鉦聲ごう〳〵と鳴り響き、汀に寄する波の音もいと靜かなり。

○眺め見飽かぬ隅田川、月に風情のまつち山、白帆片々として江を上下す。

○細鱗潑剌(はつらつ)として夕陽に閃き、輝々たる風景、意氣の頓に爽かなるを覺

もの。

○幕色蒼然として淡墨の幕を張れるが如く、螢光數點四方に飛ぶ。

○晩鳥啞(あ)々として山頂に啼き、落花飜々として衣袂を襲ふ。突如として寺鐘一打、雲霞の裡に起る。

○早や暮れかゝる燈火の頃、幽かに聞もる入相の鐘に雜じるや村雨の、檐うつ音こそ淋しけれ。

○時に夜已に深し、一望の平沙人跡絶え、一碧の大海浮帆無し、烟流渺々の涯、髣髴青きものは暗礁にして、平沙茫々の間、磅礴(ほうはく)黑きものは椰樹の影を寫すなり。

○紅露衣を沾し、芳香人を襲ひ、落花狼籍柳影織るが如く、明月清澄、列星參差、雲無く風靜かにして溪水烟の如し。

○夜淺く、風涼しく、三四五六の青星、低く垂れて寶冠の瓔珞となり、半弦の素月脚んで肩にあり、遊雲の徂徠して宛がら輕羅を絁けるが如し。

○夜更けて風全く死にたり、遠寺の錦鐘、烟霧の外に沈みて、人跡絶ゑたる白砂青松の間の靜けさは、梢より落つる露の聽くに聲あるばかりなり。

○已にして夜も早や四更の頃に至れば、諸營訣別の飲宴も、追々散ぜしと見え、四邊靜寂として、人鳥聲なく、吐朗峯頭月色晝の如し、時に總督の幕中、嘲亮として遙かに笛聲の起るあり、是れ威將軍が月に對して小笛を弄するなりけり。

○月は西に傾きたれども、空は依然として夜色を帶び、潮また上らむとして、浪の花巖頭に白し、海に金波のあと絶ゑて、空ひとしく黑味を含みて靑く、水天のけじめ、それとも見分け難かりし。

○霧霽れ雲消ゑ、月は出でたり、夜の富士は玲瓏として水晶の如く欹てり、星河粼々、氷の如く碧旻に横りて、影は麓の松に沈み、涼風は裾野より吹き捲りて兩岸の虫の聲を送りぬ。

○かくて其日も暮れなんとする程に、と見れば群鴉星を負うて茂林に歸り、樵夫月を戴きて家路に急ぐ、喞言しき虫の音に、葉末の露ぞ濃かなる。

○月魂中天にかゝり、淸影水に落ち、夜色蒼茫として四山夢より淡く、滿天の白露墜ちて聲なし、空明時に潑溂の音あるは、赤腹の躍れるにや樹影の婆娑たる處、老龍風に嘯き、漁舟の橫はれる渚に、細波よせ來てさゝやけども、白鷗の眠なほ濃かなり。

○月雪の古き寺井は水澄みて、庭の松風さゐかへり、更け行く鐘の聲までも、心耳をすます夜もすがら、げに聞けや峯の松、谷の水音すみ渡る嵐や法をとなふやらむ。

○短夜の月のあもみ、いとゞ清らかなるは、小雨うちこぼしつゝ、行く雲のかゝれるよと見るに、時雨の一聲鳴きすてゝ、又をちかたに、二聲三聲かすかに聞もるもうれし。

戀愛書簡辞典

戀愛書簡辞典

僕の理性が許しません(男より)……一
克く仰言ました(女　返)……三
枕紙も濕れて居ました……六
其の二信……七
あの時の事は……九
隨分御正直ですね(女より)……一二
惚れてゐるくせに(男返し)……一四

君の部屋は居心地がよいね……一七
エプロンのお秀ちやん……二三
燃ゆる心を抑へて……二六
今より人妻にとは……二八
御便を下さいませんの……三〇
貴郎はどう思召て(女より)……三三
矢張ローマンテイストね(男返)……三五
私が信じてよいのですか(男より)……三八
女ですものあたりまへよ(女返)……四〇

戀しい貴女の美しい手を見るやうな……四三
近日に是非お目に掛り(男より)……四五
浮雲のやうに女から女へ(女より)……四八
性慾を離れた戀の純潔に……五二
すぐとよき御返事を……五五
お顔が見たいは……五七
假初にも捨てるなぞと……六〇
表面だけの愛情で……六二
お話が面白くなつて來て……六五

行したまでよ……六八
この十月に結婚してから……七一
千度の接吻を贈る……七三
焦るゝ新妻より……七八
愛と戀の出發點……八二
別れのつらさに(男より)……九二
春の夜の夢(女より)……九三
紅の色褪せて(男より)……九四
憎きは人の心に候かな(女より)……九六

戀愛書簡辞典

堀内秀太郎著

◎僕の理性が許しません　(男より)

僕の畏敬するA子さん

ロマンローランのジャンクリストフのやうな心を持つて、凡に活動する僕をお忘れになりましたか、僕がクリストフであれば、A子

さんあなたは矢つ張しオスカーワイルドのサロメのやうな女になりたいのでせう、何處までも官能的な戀そのものに自分の總てを投じて見たいのでせう、こんな心持でいつも惱んでいらつゝやるのでせう。

戀そのものを味ふよりも相手の身体を思ふまゝに仕度放蕩に取扱つて見たいのでせう、そしてその相手がどうならうとも御構ひなしで、單に自由に取扱つて思ふがまゝにその相手を弄んで居る間がなたには無上の愉快と喜悅とを感ぜらるのだと思ひます。

然しA子さん、それは餘りにイゴイズムな戀ではありますまいか僕はその相手を何人であるとは申しません、よしそれが僕にしてもそのやうなラスティックとでも申してよいでせうか、野獸に比き戀を甘じて受けるには、僕の理性が許しません

あしからず極く冷靜な頭腦の所有者となつて、尙よくお考へ下さい。

◎克く仰言ました（女　返）

サロメのやうなA子とは、克く仰言ました、私はサロメになりませう、そうして御返事をさし上ませう。

私には名譽も財物もいらないのです、其の他のあらゆる物質的慾望を離れて、極く純眞な戀が望ましいのです。

あなたは戀の終極は必ず夫婦關係を結ぶものとしてゐられるんですもの、そして夫婦となつて了へばもう戀の終極を告げて、過去の戀は何處へ行つて了つたのか御存じないやうに忘れてお了になるんです。

私達は結婚するまでの戀だけではいやなのです、何時までも何時までも新しい戀に依つて自分の命とする心持で……勿論結婚後でも同じ心持で進みたいのです。決してあなたの申されるやうな相手を自分の仕度放題にするといふのでもなければ、イゴイズムのやうでもない積りです、お互に理解し得たならばたとへ一方がサロメのやうに主張しても、そんなに悲慘なものとも思へません。

算盤をとつて、家計より打算するやうな戀や、犬猫のやうに一時を滿足するやうな戀でなく、天賦の若さにいつまでも生きて、溫い戀そのものが望しいのです、愛に變りのないやうに、私のいふ戀にも變りがありません、永久なんです、尙これにてもラスティックと申されるなら、それはあなたの御隨意にまかせます。

サロメのやうな

◎枕紙も濕れて居ました

A子より

旅の御心持はいかゞ

妾はゆうべはとう〳〵貴郎の事のみを思ひつゞけて寢て了ひました。

一人ぢや本當に淋しゆう御座いますのよ、貴郎さまはよく御泊りが出來ますのねえ、私は御承知の弱虫ですからお傍でないと涙が出るのですもの、枕紙もしつとりと濡れてゐましたわ。

貴郎……

お笑ひになつちゃいやですよ。

喜代子より

戀しき

夫の君へ

◎其の二　信

名勝繪葉書只今つきました。

私はそれに熱いキッスをしましたのよ、貴郎のやうに思へて……

……。

貴郎もやつぱり私の事を思つて下さるの？、お癒みになれなかつたのオホホ、、嬉しいわ、感謝します。

旅の空の御事とて定めて、御不自由の事の多からんとのみ存じ御察してゐます。

でももう三日ですわね、三日の後には逢へるのですわ、その三日が待遠くて、逢ひたくなりましたの、どうぞ早く歸つて頂戴なたつた三日の幸棒がつらいのです、こんな事を書いては惡いとは思つてゐますが、これが私の本當の心なの……。

御同行の御友達なんかに見せては貴郎いやでございますよ、では三日の間御まちしてゐます。

あなたさまへ　　喜代子より

◎あの時の事は

武雄さま

お手紙ありがたうございます。仰せの通りあの時の事はどうしても頭から取りさる事が出きません。

あゝ、丁度今頃でございましたね、やつぱり今日のやうに暑い日の夕暮れでした、散歩に行かないかつて仰言から、私お伴をすればまあひどいは公園の中へ這入つてから、ウソよ〳〵て云ふけれど、ウソぢやなかつたわ、あの時のうれしかつた事は

それから二年の樂しい夢の日は過てからまた、同じあの池の端が……其の時の悲しかつた事、なぜ早く知らせて下さらなくつてと、心の中で思ひながら、手を取つてお顔を見上げた時だつたわ、池の鯉がボチャーンとはねて……、驚いて二人が犇つと抱合つたのね、鯉のしぶきで二人の着物も濡れたでせう。

それからあの松の木の下へ行つて、二人が松葉を拾ひ輪を作たでせう、幾つも〳〵、互に言ひ度い事のかずだけ輪を作つて通しませうと、十餘も通してから、武雄さんあなたは中途でなげだして、僕はこれを幾つ通しても駄目よ、言ひたい事は濱の眞砂の數よりも多いからつて。

淋しさうに二人が話合つてから早や一年になりますね、三年前に初めて戀を知り合ひ一年前にはあんな悲しい思ひをして……また同じ夏の日にこんな事を語るのは、妾達二人と夏とは何か深い關係でもあるのでせうか、それにしても奇しき運命ですわねエ。

あら……餘り長くなりますからこれで。　　さよなら

懇しい忘れられぬ　　登美子

武雄様

◎隨分御正直ですね　（女より）

このあひだは大變に失禮をいたしまして濟みませんでした、どうぞ御赦し下さい。皆さんもゐられるし、妾の外にも御馴染のゐられた、あの御座敷ですもの、濟ないとは思ひながら、心の中では勘忍して下さいよと手を合せて居りました。隨分いけすかない事を申して了つたんです、どうぞ御免遊ばせ。

そうして〳〵妾の本心は申し上げたのではありません。まるつき り反對の思ひをして居ります。やつぱりそこが人目をはゞかる手段とでも申すのでございます

ねエ、貴郎、お分りになりまして、だつて皆さんがゐらつしやる前で「妾の好きなのは此の方よ」なんて何うして云へませう。

でも貴郎は隨分お正直で初心ね、あんなに早く御歸りにならなくともよいのに「オイ歸るから自動車」だつて餘り野暮なゝされ方で

すわ、いくら妾が水商賣の女だつて、あれほど固く御約束をした貴郎ですもの。

妾も心の中ではこれから先のことを、彼樣もし斯樣もしてと色々考へてゐるんですもの、何うして、あんな事が本意で申されませう貴郎は相變らず、氣短だわ、ゆつくりと御考へになつて下さいね、今度はいつゐらしやるの、もう御越でないかと思つて氣になるわ、この手紙が着いたら一寸屋形まで來て下さいね、待つてゐますわ。

◎惚れてゐるくせに　（男返し）

手紙はたしかに受取りました、僕もおほかたそんな事だらうと思つてゐたが、君が餘りに言葉上手に云ふものだから、つひつり込まれて本氣になつたのよ、こう判つて見るといかにも野暮だつたね、これからはよく氣をつける事にしやう、それにしても例の先生、舛奴に惚れてゐるくせ、君にもなか〳〵お思召があるらしいね、僕も「うむそうか」と思つてゐると君も君だよ「北山さんは亂暴者でも男らしい所があつて、たのもしいわ、妾大好きだ」なんて旨まく調子を合はせるものだからあの場合誰れだつて君は北山君を好いてゐるやうに思ふよ、いくら僕と固い約束がしてあつても、浮氣商賣「ち

と酷いか知らないが」の女だもの、僕にすれば餘計にいら〳〵するぢやないか、それに實際あの時ばかりは、氣短だと云ふよりも、寧ひつとしたよ。「色町の女といふものは何うしてこんな克く氣が變るのかしら」と思つたよ、歸りも自動車の中で幾度思つたか知れない「馬鹿〳〵しいつまらん女の弄物になつて」と云ふ感じが出て、今の今まで腹が立つて居たのだ。

君の心もよくわかつた、もうこれから實際に信じるんだから、折角立つた腹も横にしやうね、さうだ今晩また行かう善は急げと云ふから日が暮れたらすぐに行かう、屋形もよいがどうだらう少し遠いやうだが例の山の中は、夕方までに都合して待つてゐてもらひたい取り急ぎ御返事まで

◎君の部屋は居心地がよいね

百合子さん

踊子の百合子さん、お前の其紅い唇と、お前のうるしのやうな黑髪と、お前の白い皮膚と、細いその手と足とが、イブを迷はした蛇のやうに、私に戀といふ禁斷の實を食べさせた。

百合子さん

其の頸にかけた頸環、指にはめた其の指環。足にはめた玉の靴、紅の衣に胸飾り、金や銀や寶石の、其の輝やしさは誰れが賜物？多くの男の媚のしるし。

百合子さん

遠くお前を訪ひ來し若人の、我は血も涙も、なうと知りてか紅に唇の、甘い味をば許せかし、おゝお前の其の誘惑、蛇のやうなそのまどはし、逃げても逃げても又追ひかけて我が魂をとらんとする前の力の呪はしさ。

可愛い百合子さん

僕の作つた詩だ、これを作曲してお前が唄つてお呉れ、僕はそれが望しい。

睡るが如き月の光
夢むに似たる森の姿
たゞ水鳥の声間の戀を
さゝやくそれか蓮の
ほのかかすかの音ありて
あゝ人遠し、夜深し

× × ×

花よりよその粧よと
染しはじめ空の虹
その遠き世のその空に。
戀し二人にあらざるや

三千歳一たびなると聞く
その紅の桃の實を
分ちて嶺の春の夕
戀し二人にあらざるや

あゝ時うつる世々のあと
時の潮のたゞ中に
浮きも沈みもともにして
戀し二人にあらざるや

百合子さん

お前の部屋はほんとに居心地がいゝね、濃いグリーンのカーテンが淡い灯に輝いて、羽蒲團の赤い色も美しい。

お前は眞當に僕が好き？それは、お前等玄人仲間の云ふ月並の言葉だらうと思ふ、けれども僕に僕の要求さゑ滿させてくればそれで

よいのだから。

踊つて歌つて、笑つて、はしやいで、面白く、おかしく、僕を樂しましてくれて、熱い接吻をあたへてくれゝばそれでよいのだものお前には多くの戀人があらう、それもよい、僕はお前に永久の戀を求めなくともよい、またお前にだつてそれはゆるされないだらうだから二人が相對して居る時は、僕一人の戀人になつてお呉れ、そして今の若さを、面白おかしく樂しまう。

お前に今度ダイヤの指環を持つて行く約束だつたね、お前の白魚の樣うな細い透通つた美しい指にこの指環をはめてやる時、お前はいつもの表情より以上の表情を持つて受けて呉れる事が出來ると思ふ、そしてその紅い唇へ熱い接吻をあたへて呉れるだらうね、僕はそれが待ち遠しい、いゝかね、明晩例のところへ行くから……

……

さやうなら

◎エプロンのお秀ちやん

お秀ちやん

江戸ッ兒のお秀ちやん、君はいつも可愛ね、そして生々として居て面白い、其の上美人で

お秀ちやん、このあいだ君は僕を好きだといつたね、そして「私あなたの戀人にして頂戴つて」云つたね、毎日幾百人の客に接するか知れないお秀ちやんが、そして狼のやうな男の連中からちやほやされる君が、その多くの男の中で君は僕だけが好きなの戀人になれと云ふ事も僕としてはまあ信ずる事が出來ないね、けれども嘘にも「戀人にして頂戴」とか好きだとか云はれて見ると矢張男の自惚でうれしくないこともない。

實のところ僕も君が好きなんだ、戀がして見たいのだ、いつも君の姿が僕の眼の前にちらついて居る。深い暗と濃い瞳、開き始た薔

薇のやうに愛くるし其の口元、それと調和された白いエプロンもちらついてゐる。

お秀ちやん、僕は江戸ッ兒いさつぱりとしたのが何とも云へぬほど好きだ、そしていつも野の傍に居りたいやうな氣持がする、併し今の部屋住の身ではさうしげ〳〵とは出かけられないけれども、或る程度までは、自由になるからね、今度は君の身の上話を聞して貰ひたいね、何んだかセンチメンタルな物語がありそうに思へる、どうしても君は小説の女主人公だと思つてる、どうかすると笑つた後で寂しい顔をするのが、女主人公として素的だと僕は見て居る。

僕は僕の拙い筆で君の身の上を小説に書いて見たい、そしていつまでも〳〵二人の戀の片身として殘して置きたいのだ。

お秀ちやん、お互に今の樂さを忘れないやうにね

いつかまた會つてから話すけれど、今夜は何だか君の事が想はれるのでこんなくだらないことを書きならべて送る事にした、もうこれで失敬しやうね。

◎燃ゆる心を抑へて

手紙短しとて恨のかず〳〵、皆僕が足りなかつたのです、許し給へかし、戀しさなつかしさ、いやます今日この頃の苦しさ、可愛き御身が姿、目前にちらつきてしばしもはなれず、雨につけ夜半の嵐につけ、忍ばんとすればするほど忍びがたき戀しさ、いとしさの念まし、如何にしてこの苦惱を免るべき。

あア我が生命とたのむ雪子さん、生命をも御身の愛に捧げし僕を憐み給へ、二人の愛は海よりも深く、死をも恐るゝに足らずとまで云ひしにあらずや、手紙短しとて恨みたまふな、彼の時はあまり忙しきため、思はず短く認めたゞ一時の戯れに書き並べしまでなり、何とて御身につれなくせんや、かりにも我が戀しき君にあらずや、

戀しき君の心をなやましたるを許したまへ、戀しき御身のそのくびを抱きしめ、今も尙詫びんものとのみ思へり。

夢恨みの心根持ち給ふな、やがて逢ひ見む其の日の、燃ゆる心をおさへつゝ……。

◎今より人妻にとは

おなつかしき猛さま

お怨みとも思さで御情こもる御言の葉のかず〳〵、おうれしく日毎に繰返し拜しまいらせ候。

あゝなれども猛さま「今より心をひるがへし人妻に」とは餘り御情なき御心とつく〴〵思ひつゝ、情が仇にとはこゝの事よと、古の言葉思ひ浮べ、口惜しさの餘りこの言の葉のみは引裂きて、火に投じ申し候。

斯かる心根ならんには、疾うより「人妻」と呼はれし身なるに、いかに御言の葉のよしあつくとも、これのみぞ消えやらぬ、永きうらみに存じ候。

あゝ世に出て、二十三年、我身の夢をくり返へし、双の眼は昨日今日の涙に曇り、肉は落ち青春の影はうすらぎ、鏡に向ふさえ物憂

く覺えられ候。

今はたゝ、一日も早く、永久の眠りに召さるゝ時の早かれとのみ念じ候まゝ、心も筆も亂れ果てしまゝを……。

失戀の乙女より

つれなき己が

猛さまへ

◎御便を下さいませんの

史郎さま、おかわりございませんか、美代は幸に無事でございます。

史郎さま、近頃はなぜ御便を下さいませんの、美代は一人で泣いて居ります、淋しい夕暮の空をながめながら、窓によりかゝつて泣いてゐますの、お庭の萩も優しい花を開きました。

史郎さま、あなたの御好だつた、こうろぎの聲も聞え出しましたのに、私にはそれがあわれに思へてなりません、史郎さまあひたいわ、たつた一目でも好いの、ほんとうにあひたいわ、母様も色々と慰めては下さいますけれど、やつぱり悲しいわ、貴郎がゐらつしやないと思ひますと、燃ゆるやうな太陽が西に沈む頃、美代は毎日御

門の前に立つてあなたの御歸を心待ちに待つて居ますのよ。

史郎さま、どうぞこの淋しい美代の事を思ひ出して下さい、そしてたつた一目……もう悲しくつて、双の眼は涙に曇りて、筆も字性も見えなくなりました、どうぞ御身を御大切にして下さい。

さよなら

こがるゝ

美代子より

戀しき

史郎様

◎貴郎はどう思召て　（女より）

「臭のふかき女きて

身も熱くすりよりぬ

そのときそばの車百合

蜻蛉動かず風吹かず

後退ざりつゝ恐るれば

汗ばみし手はまた强く

つと抱きあげて接吻けぬ

くるしさつらさなつかしさ

草は萎れてきりぎりす

暑い夕日にはねかへる……

隆さん、妾ね、白秋さんのこい唄が大好きな。

貴郎は何う思つて、女のくせにつまらん唄にうき身をやつすなんてよくないとおつしやるのでせう、きつとさうだわ、だつて宜いわなだらかにすら〳〵とうたつてあるじやないの、ありのまゝだわ、自然そのものに、妾達の性情にしつくりと、合はないと思はないの御覽なさい、どんなに上品な顔をしたつて、仰有る時はいつも下

品な言葉しか使へない人は世間に澤山あるわ、そんな時でも妾達は下品だつたでせうか、どつちかと申せばありのまゝだから、却つて上品すぎるのよ、ねエーあなた。

妾達は、愛のありのまゝが一番上品なものと思つてゐますの、そしていつまでもこのまゝでゐたいと思ひますの。

◎矢張ローマンティストね　（男　返）

信子さん

あなたもやつぱりローマンティストね、白秋の唄を歌つてよろこ

ぶなんて、案外つまらん方ですね、あの唄を好いて喜ぶのは全く世界にあなた一人だと思ひます。併しそれだけ、あなたは、純真で情熱のある方として私はよろこびます、何うしてあなたが申さるゝ「つまらん唄をよんではよくない」なんて道學めいたことは申しませんよ、あなたがあの唄を心から好いて歌つてゐられるあいだは、私達の戀は決して死滅することはありませんもの、

只私はあなたの美しい、そして熱のある清い愛情が、八方へ散らしはしないかと云ふ事について實は氣がゝりなりません、と云つてあなたが私に捧げて下さる愛と、他人に捧げられる愛とが同一だとは申しません、私は信じてゐます、私に下さる愛は、他の人よりも強く、固く、そして深いものだと信じて居ます。

私の好きな信子さん、青い眼玉の蜻蛉はまだ〳〵出ませんよ、きりぎりすもまだ〳〵出ませんよ、まだやうやく櫻が散つたばかりです、また私達はそんな暑い日を待つ勇氣はありません、待つ必要も私達二人には感じません、たゞ次の日曜日が待ち遠しいのです、日曜日はあなたの仰有る、所謂私達の上品さを味ふ時なのではありませんか、清らかくして、そして美しくてねエー、いつもあの唄のやうに、ではまた五日の後に味ひませう。

さよなら

◎私が信じてよいのですか　（男より）

このあいだカルタ會の歸りで、あなたのそのやさしい口元からもれ出でた御言葉はほんとうですか、云ひかへれば私がそうだと信じてよいのですか。

二三の友人達は、あなたを信ずべからざる女として、或る會合で言合はしてゐました、あまりの事に私も二三の者に質問をしましたどうしてそうなんだと、併し彼等もたゞ「そうなんだよ」と云ふだけで何も申しません。

その可愛口元で不信用を買ふだけのことをお言ひになつたのですか、それともあなたの平常の擧動がそれを買ふやうにしたのですかまたは何か中傷とでも申すのでせうか？、私は何れをも信じる事が出來ません、そうでないと信じたいのです。

羊のやうな白い肌と烏のやうに黒い髪の所有者で、黒いダイヤのやうな眼を持つた鈴子さん、彼等の噂の中から私達二人の愛は消行のではありませんか。

いつまでも〳〵私を信じて下さい、そして御返事を早く……お待

露光量違いの為重複撮影

ちしてゐます。」

鈴子さま　　健より

◎女でするものあたりまへよ（女　返）

健一さん

御手紙ありがたう、御禮申し上げます

妾の眼が黑いダイヤに見えますの？、黑いダイヤつて何處に有りますの、肌が白いの髪が烏のやうに黑いのと隨分御ほめになります

ね、そら女でするもの、白いのはあたりまへよ、健一さん、あなたなどはちつと黑すぎますわ、もう少しで印度人て云ふところなんですよ。

それにしてもまあ、いつの間にそんなに御口が御上手におなりでしたの、私はそんな御世辭は大嫌なんです、オホホ、、。

あなたは妾を信じて了ふとおつしやつて、それでまだお友達の言葉なんか氣にして居られますの、そしてあの晩に申しあげた事が本當かウソかとまだ疑つてゐらつしやるんですか。

どうせ妾は信すべからざる女ですわ、皆樣の申される通りの女で

露光量違いの為重複撮影

ちしてゐます。」

鈴子さま　　健より

◎女でものあたりまへよ　（女　返）

健一さん

御手紙ありがたう、御禮申し上げます

妾の眼が黑いダイヤに見えますの？、黑いダイヤつて何處に有りますの、肌が白いの髪が烏のやうに黑いのと隨分御ほめになります

ね、そら女ですもの、白いのはあたりまへよ、健一さん、あなたなどはちつと黑すぎますわ、もう少しで印度人て云ふところなんですよ。

それにしてもまあ、いつの間にそんなに御口が御上手におなりでしたの、私はそんな御世辭は大嫌なんです、オホホ。

あなたは妾を信じて了ふとおつしやつて、それでまだお友達の言葉なんか氣にして居られますの、そしてあの晩に申しあげた事が本當かウソかとまだ疑つてゐらつしやるんですか。

どうせ妾は信ずべからざる女ですわ、皆樣の申される通りの女で

す、そしてあの事もみんなうそなんです、口から出まかせに申した
までの事よ。
あなたは何んですの、假初にも男子ぢやありませんか、男子が一
旦信じると申されるなら一分の疑もない筈です、そんな御方でした
らもうこれで御手紙もいたゞきますまい。

さよなら

鈴子より

にくらしい
健一さま

◎戀しい貴女の美しい手を見るやうな

櫓の音に明けて櫓の音に暮れて行く、水郷の晩秋は一日毎に、多
の懐へ近づくに依つて雜木のわくら氣が、天地を明るく冷めたくし
てまゐります。
二日前から降り續いた雨は靜に東より晴れてゐつて、暴れ狂ふた
やうな水邊も平和意に沈んで、廣い濱べには圍く陣取つた群集の影
際立つて見られます。が
それは水死の美人を取り卷いた人達であります。

年の若い女、然も肉付の好い美人が、死なねばならぬ事情があつたでせうか、それとも昨日の雨風に過つて浚はれたのか、白蠟のやうな細い手には三ッの指環が屈められた指に附いてゐる。手首を斜に一筋の青い藻が絡んでゐます。

艶子さん、この名も知れぬ水死美人の手の印象を忘るゝ事が出來ません、繼母のためか、情夫のためか、お金の……、それは好いとして、僕にはこの白蠟のやうな手と指環が思はれてなりません、透き通るややうなフランスルビーも高彫の物も皆あなたのものそつくりです、戀しいあなたの美しい手を見る時のやうな感じがいたします。

夜更た時、闇の床に目醒めた時、この憐れな水死美人の手が思はれます、やがては我等の運命にもこんな惡魔の呪が廻つて來るのでは有りますまいか、僕はそれが案じられてなりません。

◎近日に是非お目に掛り　（男より）

峯龍どの、その後はいかゞ御暮しなされしや、近日には是非とも御面談仕りたく、その節ゆる〳〵お話仕りてもよろしき譯なれとも お前さまも一流の姉さんとて、都合もあらうし、いつも早く歸り行

かるゝ故、心落ちつけて話も出來ず、他所行を進めても、或る時は差支があるとて斷られ、或る時は腹痛するとて約束をふいにせられたり、また芝居見物をも何んの彼んのと申されていつもていよく斷はるゝにかんがみ、豫め書面をもつて申し上げ候間、その御積りにて、よく御考へ置下されたく候。

お前樣と馴染に相成り候てより、はや二年の日は夢の昔にと相成候も、そのあひだ毎日會はるれば結構に候が、さうはお前さまも出來ず、せめて呼びにやる度に來てもらへばよいと思ふは、こつちばかりのやうにて、先づ十度呼べば一度位お顏が見られる位にて、二年のあいだと申してもさよう十五六回しかお目にかゝられず了り候一流姉さんのお前さん故、それでもおつとめに十五六回も參ゐられたと申すなれど、小生は「礎の家」へ度々まゐる目的はお前さんに御目に掛りたいばかりにて、毎月千圓に近い金を遣ひ候て、それでもまだ會れずに歸ることの多きはちと馬鹿臭いとはお前さまもお考へなきや。

客止めにして見んとすれど肝心のお前さまが不承知のやうなりと云ふてこれと云ふ旦那もなきを聽けば、尙更小生も意地となりて、女將を困らすこと度々に候、一体全体何ういふお積りかお前樣の意

志を御きかせ下され度候、別段好いた男もないと云へども、矢ッ張り好いた男に情立てゝゐることゝ存ぜられ候が、いかゞか

強いてとは申さぬど、返事は早い方が望ましく候、何れ四五日のうちには「礎の家」から呼ばす故そのとき面と向つて色よい返事して呉れるとも何れとも、お前さまのよきやうにお取なし下されたく候。

先づは右まで申し上げ候

勿々

浮雲のやうに女から女へ　（女より）

毎度、御ひいきに預りまして厚く御禮申げます。

また昨日は御親切な御手紙下さいまして、早速御返事を致さねばなりませんでしたが、つい延引いたしまして何とも御詫のいたしやうも御座いません。いづれお目に掛りましたときに、何もかも御詫びさしていたゞきますが。

偖て何う申して、よろしいやら、はきちがうことばかし、してゐるわたくし故、いつも失禮いたしてすみません、何うぞ御許下さいませ。

只一つだけ、旦那さまに申し上げて置きたいのは、わたくしは何

と申されても、男の弄みものにはなりませぬことで御座います、この爲めにあなた樣のみならず、華族樣のまだお嫁のない若樣から喧しく申されて、只今でもお嫁になれと御申込が御座いますが、それさへお斷り申そうと思つてゐるくらいで御座います、いやその方ばかりでなく隨分澤山のお方からいろ〳〵と申されますが皆御斷りしてゐる次第で、從つて待合や料理屋さんの女將さまからも、きつい御小言も御座いますれば、もうお前をよばないと云ふひどい目にも逢ふてゐるのです。元より私は自前のことゝて賣れなければそれまでのことゝ、たかはくゝつてゐますものゝ、皆さまにすまないと思つてゐます。

わたくしは、今の殿方は餘りに浮き雲のやうに女から女へと走られるのがよく眼に見え、決して心の底から誓ひをして下さる方は先づないと思ふからです。多くのお馴染のうちにたつた一人この方ばかしはと思ふ方も御座いますが、それもどうなることやら分りません、いづれ御遊びなさるお方ですもの、すぐと浮氣の雲でとんで行かれませう。

わたくしも御蔭で水商賣をいたしました爲男の方の裏のうらまでお心がわかるやうになりました、これもあなたさまや皆さまのお蔭

と未だによろこんで居ります。いづれ御禮は御目もじの上にて

あら〳〵かしこ

◎性慾を離れた戀の純潔に

M子さん

先日は隨分と御手厳しい御忠言を下さいまして、全くあなたでないと、あのやうに云つて下されまいと、私は深く感謝して居ります

併し私の本意をも是非お聽き下さい、またこの手紙を御覽になれば、なるほどと御氣附けの事と存じます。從つて私は現在、あなたに誤解されて、却つて私の本意を明瞭にする事の出來る機會になり至つた事をよろこんでゐるのです。

M子さん、今の青年男女の交際が危險だと思はれ、私に女性に近づくなと申されるのも、過渡期にある我等日本の青年男女としては寧ろ當然の御言葉とは存じます、

併し私達青年は若い女性に接近する事によつてどんなに世の中を廣く知る事が出來るかと云ふ事をつく〴〵思ふのです。

たまには私達青年の中で最初より或る野心を持つて女性に接近するものもありませう、が私達は學校のみの世界にては餘り狹くまた

何等のうるほひもなく、無味乾燥な青年期を終りたくないからです三角形乃至多角形の私達は四六時中、圓形と曲線の持主たる女性に接近して、私達の知らざる未知の世界を知り得たいのです、それは優しみと申しませうか情緒のうるほひと申しませうか、而して無邪氣なる眞情にふれて見たいのです、これがやがて、戀に陷る經路と申されるかも知れませぬが、性慾を目的としなかつた戀ならば、私達は祝福すべきものかと存じます。

M子さん、私は只今あなたに申上た事は、要するに精神的な戀の本項を述べたに過ぎないのです。社會の習慣等の制裁を根本として

は到底、戀の純潔は見とめられますまい、此等を重きにおかずして清新なる青年男女が精神的交際を望む事は、一般の人間學に依つて中老年でも判つてゐる筈です。

性慾を離れて、得たる愛を出發點として、私達は深く進みたいと存じます。そして進み得た最後の決勝點が性慾に陷れば、それは當然の歸結ではないかと思はれます、十分によく御考へ置き下さい。

◎すぐごよき御返事を

千代子さん

先日の手紙は御覽下さいましたか、もうかれこれ半月にもなりますが、一向お返事がないでもしや、あなたの御手に入らずして誰れか外の人が讀まれたのではなからうかと思はれます、それとも何かお腹立で……、もうあんな奴には返事をする必要もないとでも御思召たのでありますまいか、そうでしたら、餘りに慘酷です、併し私はさうでないと信じて居ります、またよし御忙しいにした處で手紙の一本や二本書く暇がないとは誰れしも思はれませず、いかが致されたのですか、重ねて御伺ひ致します、すぐとよき御返事下さるやう、御願ひです。

◎お顔が見たいは

道夫さま

先達てから、私の病氣をしてゐる事をまさか御存じないとは申されますまいね。一昨日も叔母様が御越になつて、ちやんと見て御歸りになりましたもの……。

それだのに、只の一度も慰問に來て下さらないとは薄情な方ね、こんなに病人から催促をうけるなんて、貴郎も餘り男らしくありませんよ、而し私は慰問を受ける權利があつて申すのですよ、何と云

はれたつて、貴郎にはグーの音も出ないでせう。それとも、もう妾の事なんかすつかり御忘になつたの……

道夫さん、貴郎がこの春御病氣で苦しんで御いでになつた時どうでしたね、さん〳〵に世話を燒して置いて、私の時には知ぬ顏なんて餘り虫がよすぎやしませんか、やつぱり貴郎は愛のない方なんですね、ほんとうに女なんてつまらんこと、妾もう悲しくなつてよ

道夫さん、この手紙讀み次第に、一度位來て戴きたいわ、羊羹の三四本も持つて御見舞に來て戴きたいは、併しね私は胃腸加答兒なんですから、羊羹なんか食べられないのでね、食物以外のもの、そ

う〳〵本がよいわ、文學に關したものがほしいよ、幾冊でもかまはないから持つて來て頂戴、貴郎のお顏も早く持つて來てほしいの妾見たくつて〳〵仕方がないわ、オホ、、、。

道夫さん、これを讀んで何だ胃腸か食しんぼうのなれの果なんか云つたら承知しませんよ、憚りながら食しんぼうでも貴郎のやうな一夜づくりの急腸なんて云ふそんな下品なのとは少々質が違ふめですからね、じや確りと御願致しましたよ、どうぞね、今度の病氣には妾もう實は困つてるの、毎日々々天井と軸もにらみつこで、これにはもう眼が倦々しましたからねエ、きつと早く御顏を見せに來て

頂戴……これが本音なのよ、

さよなら

病床より

道夫様

◎假初にも捨てるなぞと

春子さん、いやな雨がしと〳〵と微な音を立てながら降ります、どうして春雨といへばこんなに神秘的な、そして重々しい氣分になるのでせうか、こんな雨が降れば降るほど、このあいだのばん、あなたと爭つた事を思ひ出します。

何うしてあなたはあんなにヒステリックだつたんですか、何も僕があなたを捨てると云つた譯ぢやなし、また苟にもそんな事を胸に抱いた事もないのに、僕から捨てられてしまふやうに、あらゆる皮肉と愚痴……、ぢやないでせうけれど、あてこすりなんかを云つてわめくなんざあ全く僕も果氣にとられてしまつたのです、一体あなたはどうしたのです？。

なる程、久子と云ふ人が僕を好きだと〳〵云ふのは單に好きだと云ふことだけで、外に何の意味も關係もないのです、これだけは世間の人が何んと噂をたてやうが、僕は男として立派に明言しておき

ます。

ねえ、春子さん、僕を信じて下さい、もうやがて春雨も晴れませう、それまでもなく、あなたの胸の疑も晴せて下さい、お願です、いづれまたあとより

時男より

◎表面だけの愛情で

時男さま、妾の申すことがそんなにヒステリックにお聽になりましたの、そうで御座いませう、いつも平氣を裝ふ事にお上手な貴郎さまでいらつしやるんですもの。

妾は何もあなたさまから捨てられる事をそんなに苦痛だとは思ひません、何故かと申しますれば、表面だけの愛情を受けて滿足するやうな女でない積りでもゐますれば、日頃御口先ばかしで、甘つたるい事をおつしやつて、心底からの愛情が少しも得られないからです、妾はお口ばかりの愛よりもお心からの愛が望ましいのです。

時男さま、よく御考へ下さい、女と云ふものは、全く愛のみに生きる動物です。しかし表面だけの愛、性慾の爲めの愛、明日にも變るやうな薄い愛……、こんな愛で滿足するやうな女も隨分ありませ

うが、私はいやです、どこまでも心の底から出た愛でなければいやです。

時男さま　あなた口先が御上手なだけ、女より受けた感じのよい言葉……。それが總ての男性を魅らして了ふやうな言葉をお受けになればかならず、二重にも三重にも愛をせられることゝ存じます、そして自分達の性慾がすめば、他の方へ〳〵と移つて行かれるのです、久子さんとやら仰言るお方にもやがて移られるのでせう。どのやうな方かは存じませんが、一時の性慾のために盲目的に進まれる程危險と害の多いものはありません。その人はそれでよろしいけれど……、多くの眞面目な、眞の愛に生て行く女は泣く事でせう。もう何事も申し上げますまい。

何卒御靜にお暮しなさいませ。

春子より

浮れもの、

時男さま

◎お話が面白くなつて來て

今日此頃の暑さは何と云ふ烈しさなのでせう、朝からむし〳〵と

してほんとうにやり切れなくなりますわね、どうして居られます、又氣むづかしいお母さんの御小言を頂戴して居られるのではありませんか。

御小言と云へば、此間は間の悪い事でしたね、折角いろ〳〵とお話が面白くなつて來たときに雨が降り出して、到頭いそぎ足で早く歸らねばならなくなつたのは、いかにも殘念でしたね。

あの時はあなたの着物も濡れたでせう、歸つてから御母さんに御目玉を貰はれたことと存じます、ほんとうにすみません、罪もないあなたを苦しめて御氣の毒でした、それが僕のやうな書生着なれば雨にぬれやうが、風に破られやうが、そんな事はどうだつて宜いのですが。

然し人も來ない、あの邊のながめもよくベンチまで設けてある大きな樹の下で、あなたと二人がゆつとりとしてお話の出來るのは、今度はいつにしませうか雨さへ降らなければお互にどんなに心樂しかつたでせう……、にくらしいのはあの雨ですわね……つい餘計なぞのやうな事まで申して失禮いたしましたが、何うぞあしからずね。

露子さん、またあんな樂しい日の一刻も早く來るのを待ちわびて

居ります。

露子さま

昇より

◎實行したまでよ

御なつかしき昇様

まあよく御存です事ね、御言葉の通り妾やつぱり、お母さんに叱られましたわ、この雨の降る夜更に何處を歩いているのそんな事をしちやあ着物だつてたまつたものぢやありませんて。

でも妾は構はないと思つてよ、眞の愛の爲めには何物をも犧牲にする覺悟で居りますもの、着物の一枚や二枚は當然の事ですわねエ

これは妾がいつも口ぐせのやうに言つてる言葉なんですから、實行をしたまでの事ですわ、今度會つたらほめて下さるでせう、ほめて下さらなくちやいやよ、つまりませんわ。

妾の好きな昇さん。

今度の土曜は學校で音樂會があるの、例によつて妾は幹事よ。あなたいらつしやらない、でも御話は出來ないことよ、それから日曜日はお父さまもお母さまも御不在で妾一人ですから出られませんの

下女とお留守番ですのよ、ほんとうにつまらなくつてよ、あなた宅へいらつしやらない……オホホ、、、

昇さん

次の土曜日まで待つて頂戴ね、學校からすぐあそこで待つてゐてよ、ねえ、きつと待つて居りますから、いらつしやいね。

こんどはゆつくりお話を致しませうよ、メテルリングのブルーバードだのゴルキーの生る屍なんかね、妾それを樂しみに今から待つて居ますわ、いづれ御目に掛つて……待ち遠いやうな氣がしてなりませんわ。

さよなら

露子より

妾の好きな

昇さま

◎この十月に結婚してから

妾の戀しい清男さま

御許し下さい。つい御無沙汰をしましてすみません。筆無精の妾ですもの、お許下さいませうね。

御元氣で毎日澤山の職工と御一緒に、眞黒になつておつとめの由

カーキーの職工服を召した御姿が日にうつります。妾それが大すきなのです。何故かと申しますと、きたなく働いて美しく暮すといふのが私共の主義なんですもの。

この十月に結婚してから、妾は何ういふ風にして行くか、今より見てゐて下さい、お臺所のことからお針のことまで、きつと世話女房そつくりになつて見るわ。

清男さん、笑つちやいやよ、いゝね、今迄のやうなお姫さまぢやないわよ、きつと立派にして見せるわ、あなただつてきつと其の時は驚くでせうよ。

お母さんも近頃は大變お元氣よ、こちらは櫻の花も咲いたから二三日休暇を貰つてお越になると、えゝつて、毎日言つて居ますわ、二三日お暇をもらつて來て頂戴ね、妾もほんとにお口に掛りたいわすぐにいらつしやいね、まつてゐますから。」

緋佐子より

◎千度の接吻を贈る

私のいとしい照子さん

私の思ひはすつかりお前に……。」

床に就く前に少しばかりお前に書き送りたい。四條で電車を待ちながら待合所の椅子に掛けてゐた時に、お前が私に熟考を強ひたことについて。その時お前は私が何の役にも立たぬやうに云つたが、私にだつてお前に道化役者位ゐな役にも立つ積りだ、同棲すると云ふ點で何の役にも立つ事が出來なくなつたつて、其れが誰の罪だらう。

それではお前は私が苦勞をしてゐないと思つてゐるのかい。それでは、丁度私達二人が愛し合ふやうに二人の男女が愛し合ふ時に、誰しもが抱く愛情、自然の人情を、私も亦經驗する事が、きつと幸

福でないと思つてゐるのかい。それに男も女もそうした權利を禁じることは出來ないぢやないか、自然はこんなに私達をお互のために造つてゐるのだもの、キリストも云つたらう、どんな樹でも、どんな物でも不必要なものは造られてゐないと。だから私達も造らなければならないものだ。私達の年ではまだ恐れる程のことはない。本當にお前は私に苦勞をさせるのだね。私はまだ〳〵幸に愛情をもつてゐる。一緒にならうぢやないか、そしたらお前はきつと私がお前の役に立つか立たないか解るだらう。そして私がそばにゐる時は、餘り無情い樣子をしておくれでない、また私がお前を可愛がる時に

不愉快そうな樣子を見せたり、泣いたり怨んだりして、私の振舞ひに無愛想な樣子をして、私の心を掻き亂しておくれでない。お前はどうして私にそんな樣子をするのだらう。それはきつとかうした風にお互に知り合つて、愛し合ふてゐるからだらうと思ふ、實のところ私達の年頃になつて一緒になるものにはありかちのことなのだ。だが結局まだ何方からも最後の言葉を云はなかつたぢやないか。

どうしてお前はこのあいだから泣いたり、其の上、沈んだりしてゐるのだ。お前は今になつて惡いことは皆な人が私達に仕掛けたんだと云ふことを悟つたからだお前はもう他處へは行かないでお前を熱愛するお前の博に慕はれ、愛護されて私達のうちに安らかに暮すことの出來るのを、知つてゐる筈だ。それだのに此の上、まだどうして私達は苦勞に苦勞を重ねて間違つた誹謗を受けなければならないのだ。こんなことはみんななにかなしにお前を窘める人達の上にあるべきことだ。若し私達が一緒になつてゐたら、明日のいゝ日を樂しく暮す事が出來たらうに。樂しく本當に樂しく。だが、いや、私達の心　喜びに引替へて、それは悲しみとなるだらう。二人一緒に樂しい散歩をしたり、野外の美しい空氣を呼吸するかはりに、私達はお互に別々になつて離れてゐなければならないのだらう。お前

にはきつと其の方がいゝのだらう。お前はそんな曖昧な境遇を不快にも思はず、正さうともしないやうに考へて居るかも知れない。またお前がお互を苦しませる爲めに持つてゐる樣な頑固な意志を擲つて、私達二人がうまく行くやうに、私達を幸福にするやうに其の意志を持つておくれ、その時、お前は私が都合よくお前に仕へるかどうかがわかるだらう。

愛情を籠めた千度の接吻を贈る。

◎焦るゝ新妻より

只、一週間の御別れに文參らするは御叱りの種とは存じ幾たびか筆なげうち候へども、遂に何も彼も覺悟の上にてこの文認め申し候

僅か一週の日に候ながら、初めての御別れ故かゝる心細さを何卒御赦し遊ばされたく候。

絶間なき雨の間に遠き山路を、貴夫樣初め中隊の方々も御恙あらせられず、演習も御良好の結果を得させ給ひし由、私もことの外嬉しく存じ申候。

さは候へど貴夫樣にはかゝる時身命を忘れての御働きゆゑ、又御けがなど遊ばさぬやうくれ〴〵も祈り申上候、次に家の事は御心配

御無用に候、婆やも毎日宿泊致し居り候、又奥様達や、出入の方などに折々まゐられ慰め下され候まゝ、左様淋しくは是なく候、縫かけの御召物も出來上り只今かの人形の衣服を仕立居り候、御歸りの日には人形にも美しき衣服きせ共々おまち申すべく候。

其の日はかねてより待ち焦れし私の誕生日とて、いかにして一日を暮し申さんかと今より考へ居り候まゝ、貴夫様にも何卒よき御工夫を願ひ上候

仝じ處さだめぬ旅の御身とは申せ明日よりは一歩一歩と此の地に御近き給ふ由、なんとなふ心強く思はれ候。

「めざましき功せよ、さらすば楯にのりて」と夫を戰地に送りけるとやら、スパルタの婦人の物語り、常々賞讃し給へる貴夫様には、さぞや女々しきと思召されんも、もろき私の事、此のたびのみ御赦し下されたく候、尙手紙さし上げてあしきやうに候はば次の御便にて御知らせ下されたく候。

何卒御身を御大切に遊ばされたく

さらば

留守うちに焦る妻より

行軍中の

貴夫様

◎愛と戀の出發點

○女　より

妾の最も尊敬してやまない美知夫様。

先日はいろ〳〵と御教示下さいましてありがたう存じます。それからと云ふものは妾もいろ〳〵と考へました。あの晩もとうとう寢ずに考へ通しました

いづれはお眼にかゝりて御教を受ねばなりませぬが、それでも御眼にかゝるまで待つてゐられませんもの故失禮を省みませず、手紙

で御伺したいと存じます。

それと云ふのは何うすればあなたが申されるやうな美しい愛が出來るかといふ問題なんです。性慾を離れた愛の出發は何ういふ動機から起るものでせうか、一度は隣人の愛と同じ出發點で進んでもその度が密になればなるほど、何時とはなしに性慾をお互に解して了まふのが、妾は立派なそして美しい戀でないかと思ひます、妾は性慾も愛も一現象と存じます、そして戀そのものも愛の美しい現象と存じます。

美知夫さま

妾はこの美しい立派な愛に生きたいと思ひます。決してその人の運命を傷つけないで、その人ばかりを熱愛して、自分と云ふものを立派に生かしたいと存じます。そうした事をあなたさまは御許下さいますでせうか、どうかお教へ下さいませ。

壽惠子より

○男　より

壽惠子さん

人を愛するといふことは却々むつかしいことと存じます。愛されるものの將來に幸多かれと願ふのが最大の美しい愛であることはいつも申上てゐる位ですから、克く御分りのことと存じます。

自分も愛されたいために他を愛するは申すまでもなく利己の愛で餘りに唯我的でないかと存じます。キリストは決してこんな愛は說かなかつたかと存じます。

壽惠子さん、あなたは戀も愛も同一視されるやうですが、さういふことよりも戀そのものが果して愛であるかを克く御考へ下さい。私は寧そうでないと思つてゐます。克く御心を落ち着けて御考へ下さい。戀には自己の性慾を充たさうとする動機が主となつて働いてゐます、その爲めには他の隣人への愛をも犧牲としてゐます。そし

てそれが經續することを願ふためにお互は無理に自己を捨てて相手によつて自分を見出そうとしてゐます、それもよろしいですが、一度一方の將來を氣づかう事が出來、そして他方を愛し得なかつた場合は、茲に戀の破滅を來たして、時にはお互に恨みあふことになりませう、それが世間に多いのです。尙よくお考へなすつて下さい、まだ充分御分りでないやうに思へますから。

美知夫より

○女より

美知夫さま

早速御返事下さいまして難有存じます、妾は妾の愛する方が、たとへ妾をお捨てになつて、それが却つてその方の將來に幸福であるやうでしたら妾は破滅になつても恨むやうな事は致しません。その方の幸福をねがふことによつて妾としての愛の滿足をありがたく感謝せねばならぬ位ですもの。

尙徹底して、その方の幸福の爲にはよし、その方が他の御婦人と御結婚なすつても、妾はその方を恨んではならぬと思はねばなりませぬ。そしていつまでもその方の幸福になれかしと念じもし祈らねばなりません。

美知夫さま、妾にはそれだけの覺悟がございます、素より運命は妾達の愛を破滅するべく魔手を擴げませう。それを擴げられると妾達は益々それに打ち勝つ勇氣をもつて、妾達の愛の强固さを固めねばなりません。

美知夫さま、妾には充分自信と覺悟がございます、決してあなた様を不幸に陷らすやうなことをしないと云ふ……お恥しいことながら、妾達の將來を破滅する魔手を打ちこらすだけのお金もございます。よしそれがなくても妾には將來を幸福にするだけの技能もございます、かよわい女の腕とお思召すな、このかよわき腕にも信と力が今十二分にこもつてゐます。

美知夫さま、あなたの御幸福の爲めにはあらゆるものを投げうつだけの身体と精神を持つてゐるものはこの壽恵子ばかりと思召せ。

このやうに申上て何うかと思ひながら申上たので御座います。どうぞあしからず。

○男より　壽恵子より

壽恵子さん

餘り無理な御考へをなすつてはいけませんよ。一口に申しあげま

すと、あなたは、強つて隣人の愛を戀そのものと仝じやうにしてゐられます、それは餘りに危險ではありますまいか、

私は女といふものは……殊にあなたのやうなお若い御婦人方は……男から捨てられて一生涯操をたてゝおし通したといふ事をきいた事がありません、家族も親族も社會も許しませねば、女その人自身も許しませんやうです、どれだけの御覺悟かは知りませんが、それでは餘りに御無理と云ふもので御座います。一般世間にありふれた婦人と、いつも清らかな熱愛を自分の生命としてゐられるあなたと仝じやうには、私は見られませんが……

併し、壽惠子さん、あなたの眞の告白をきいて、私は心の底から厚く御禮申上ます。どんなに私は涙を流して、あの御手紙を見つゝあなたに感謝したでせう。これほどまでに私を思つて下さるのかと思ふと、涙が知らず〳〵のうちにじみ出てまゐりました。

併し、あなたの觀らるゝ私の幸福と、私の觀た私の幸福との意味が大變に異うやうに思はれます。私は私自身でいかに醜い人でも汚ない人でも、またいやな傳染病者でも、其の他の人と仝じやうに愛することによつて私の幸福を求めやうとしてゐるからです。ですから身に一物をも所有したくありません。果してあなたの御考へはど

うでせうか。その上でまた、ゆつくり御話申上ませう。

美知夫より

○別れのつらさに　（男より）

別れのつらさに人知れず袖ぬらせしも昨日の樣思ひつるに、早や百にも近き日を過し候。

友とては只峰の松吹く風の音、訪づるものは細谷川の水のさゝやきに候へば、なか〳〵に東の空の戀しう覺え候。まして冷かなる夢さめし枕に、あはれ血に鳴く杜鵑一聲、さては遠寺にひゞく鐘の音、聞きては斷腸の思ひして、ひたすらにおん身の戀しうなつかしさの念はまさり候ひて、そゞろ泪のにじむ事さへたま〳〵にござ候

封じこめしは、已が日頃最も愛する長芽草にて候、我が住あたりの景色この花に封じこめ候へば、おしのびぐさにと。

○春の夜の夢　（女より）

今宵の空いとうるはしう月も冴えて候

あはゝ　の月いく夜かの雨にさへぎられて、情なくも逢ひ見ざりし戀しき君がみ姿、想へば思出深き夜にもあるかな。

花野の露の袂ぬらせし二人、別れの悲しさに泣きてしその面影を

寂しう笑みて照らして、オ、その夜の月、奇しくも今宵の姿に似て候。

あゝそのむかし、赤き心のへだてなく、理想の、希望のとたのしき思ひにあこがれしを、そはすぎつる春の夜の夢、いとはかなう消へ失せ候はんとは……。

さるにても、あゝさるにても、いにし昔は未だ眉若かりしも、今は影さえ痩せ老いたらむやうにて怨めしくも存じ候。

（男より）

○紅の色褪せて

我住む庭に手植の芍薬、心なき雨にさいなまれて、紅の色いたく褪せて候、日頃よりあたゝき泪濺ぎけるに、また何故にかくもしを れ果てつるとは、あア我が愛の足らざりしか。

これもおん身等がかくる由なき情、うくる由なき心の、遠き地に在ましゝ故からにこそ候。

はてしなき思に耽りて、なつかしの念やみなく、若葉にやどる夜半の露ほそ〳〵とこぼるゝを見れば、あはれ十三夜の月は雲にかくれて候。

○憎きは人の心に候かな　（女より）

夕には星の涙に蘇り、朝には旭の光りにはえて、詩人の筆にうたはれ、またある時は憧れよる美はしき胡蝶に、甘き戀の囁かれしこともに候ひしならむに。

その盛りの色香をつみとりし人の心の、誠に憎う思ひ候を、なほ其の色香の衰へし、今、無慚にもこれを捨る心は鬼とも蛇とも身の毛もよだつばかりに候。

この一事こそ今の世の人の心を表はして、あまりあるものと存じ

候。

花の心を思ひやりては、なか〳〵に憐れに堪へられず候まゝ、捨てられし花の一片今かく封じきみの御手許まで送りて、思ひやり深き御許さまの御心に訴へ申候。

あゝ妾等女の身は、この憐れなる花に似て、これを捨てし人こそ世の情なき男達に似て候。

あゝさるにても恨み多き世、憎きは人の心に候かな。

（をはり）

◎別れてから

あゝ、あゝ

とう〳〵わかれて來たのだと思ふと滿身の血がにえかへる樣である。

あゝも一度戀人〳〵叫びたい。

知らなかつた昔にかへりませうと云ひきつて涙一滴おとさなかつた妾が、歸へりに、いつかあなたを待つたポプラの木の下で泣いたことは、思ひも寄らぬ事に御思ひでせう、わかれてからつくづくあなたが戀しくなりました。

宥して下さい！、妾が惡うございました、悔いて居ります。けれ共もうおそいでせう、今更悔いたつて何になるでせう、妾はなぜまアあんな事が云へたのでせう、よくもあんな思切りのよい事がと思つて居ります何卒宥して下さい、そして一言あやまらして下さい、ねエ……もし御ゆるし下さるならば、たとへ此儘永久にお逢ひする事が出來なくとも妾は少しも恨みはありません。

戀と云ふ觀念を制たうと誓つた妾、再びあなたを戀人とは申しますまい、戀人としてのあなたを忘れませう、けれども、妾は「己が

愛する人よ」と此胸をめでた人の面影は、いつまでも忘れられません。慕ふ心は止まないが、それはあなたぢやない影なのです。はかないがしかし永久にきえぬ影を慕ふのです。

あゝもう一度戀人と叫びたい……いゝに再び戀しいとは云ふまい戀人は影なのだもの、しかし最後に「友にならう」と仰言つたあの御言葉たけ、私の生命のあるかぎり記憶する事を免して下さい、妾はそれに滿足します、そしてかげながらあなたの幸福ならむ事を祈らせて下さい。

あらもう何事も思ひますまい。

運命のまに〳〵ほゝえんで生きませう……けれど■ぐ〳〵かう落ちも涙は……。

◎悲しく存じ候

悲しく存じ候

すぐせつたなく、泡沫の運命に泣きてお別れ申してより早や二十餘日ひたぶるに思ひ煩ふは御君の事。

彼是と其のかみ月の溶ける潮のさゞめき、汀つたひ語りまゐらせし事を思ひては、そぞろ胸もせまりて熱き泪の溢れ來たるを覺え申

し候。

妾は永久に彼の宵を忘れまじく候。

彼の汀を忘れまじく候。まことに死別にまさる生別の永き怨は永劫にこの小胸に刻みつけられて、折々泪をさそうものとお察し下されたく候。

さりなば現世の荒浪、思へぬさわり多き此の世の習ひ、いつまたあひまゐらせん折も不知火の、浪路いと遠き筑紫のはてよと考へ候時熱き〳〵泪は零れ幾度ぞ走り返りて、御膝に泣かん限りの涙を絞らんとこそ思ひ侍りしが、振返り見れば御君は尚ほ小舟にたたずみ給へり。

折から海の果より靄わけて静かに上る月影に春秋十九、浮世に早や戦ひませる雄々しき姿の砂にやつれし影のうつれる。幸おはせと幾度か小聲に叫びて此たびこそ別れまゐらせん、浪路の果て遠ふ身はへだつとも、などとこの戀忘れ申さめと、心に悲しさだめ御君が未來の幸を祈りつゝ、更けなば更に募る思ひ、さらば〳〵と濱路眞砂路行けど、行きぬれど盡きぬ眞砂のその如く、新しうにじみ湧く涙のとどむるすべも知らざるに。

うしほの唄、優しき貝のさゞめ言、其等も今はひとしき思ひ出の

涙と化し、弱き女心よ、え堪へじあゝ御察し下されたく候。

夕べ華やかなる薔薇に燃ゆる雲の行方よ、やゝに距りては鈍色。

朽ちゆくもそれすら、悲しかりし日を思ひ出て、そゞろに花の露の一

みかは、さまよひの袖もしとゞに濕すを覺え候。

思ひ出れば筆に先立つ熱き涙のみを綴りまゐらせん、此の文机、

よべ濱に月のゝぼらん折りは、其の夜を偲び泣くいぢらしの女心よ

と、たゞ願ふは幾千代かけて、せめては名をのみを忘れたまはざる

ことを。……

あゝ二百廿里！まことよ山はいく脊、海は千尋さめは更に無情う

ゆるを。

◎破れし胸に双手をあてゝ

蒼碧の水を堪へた川面に、河岸の家並よりもれ出る灯の映るころ

になると、街はもう隅々までも薄絹のやうな夜の幕にとざされます

そゝり立た洋館の窓からゆるやかなピアノの音が洩れそめると、青

白い瓦斯の光を身にあびて、並木の下をゆく乙女の姿を夜毎にみと

めます。

何を思ひの憂顔。濃い髪を七三にわけて、凄いほど美しい其の人

も、運命は全じ悲しきものとのみ、やがて聞ゆる歌聲は、痛手深きこの胸にいかばかりおののかせる事でせう。

若うして破れし胸に双手をあてゝ、こひし方の夢をふりかへれば打ちふせた己か睫毛のひまをまろび出る熱い涙よ……はかない路傍の行きずりの縁にも似た淡い思ひ出を、せめてもの慰めに、住なれし此の家を立ち出で、行衛さだめぬ旅の空、身は浮草のそれなれど假り寢の床の定まりますれば、またお便りを致しませう、どうぞ御身体を御いたわり遊ばしますやう。

◎語り合ひし庭の窓

お別れいたしましてより、早や二月にもなりますねえ、かすみの衣はいつしかぬぎ捨てられ、至るところ自然のなす新緑の香にみなぎつて居ります。

露子さま！。

私はあなたが戀しくてなりません。慕しくてなりません。あの美しい杜鵑花の園、萩の美しいお庭、あなたと語り合ひし庭や窓、あゝいつまでも〳〵忘れることは出來ません。もう私には二度とあん